【 研究ノート 】

ステュアートの工業化論

――『経済学原理』第 1 編の分析（5）――

岩　本　吉　弘

［6］ 商品経済システムと外国貿易

（1） 本章の課題について

（2） 食糧需要と外国貿易：第 1 編第 15 章～第 18 章

（3） 商品経済システムのオランダ・モデル

（4）「受動的貿易」と農産物輸出：第 2 編第 5 章・第 6 章

（5） オランダ・モデルと「能動的貿易」：第 9 章

（既発表分）

［1］ 検討視角の設定－ヘレンシュヴァントの視点から考える　（1）ヘレンシュヴァントのスミス批判から考える　（2）人口論への着目　（3）人口論から工業化論へ－問題の所在　（4）本稿の課題について

［2］ 貨幣以前：第 3 章～第 5 章　（1）前提としてのヒューム　（2）「異なる観点」－人口と経済成長－　（3）人口波動と商品経済化　（4）奢侈・貨幣以前の局面　（5）農業生産主導の均衡　（6）人口増殖原理の転換　＜以上本稿（1），本誌第 82 巻第 1 号（2013 年 7 月）＞

［3］ 貨幣以降：第 6 章　（1）奢侈と貨幣の定義　（2）「新しい局面」－貨幣と実物的欲望－　（3）貨幣流通の第 1 回目モデル　（4）工業の自立へ　（5）貨幣経済の成長パターン　（6）人口増殖の貨幣経済的形態　（7）「富者」と地主階級　＜本稿（2），本誌第 82 巻第 2 号（2013 年 11 月）＞

［4］ 近代社会における農業・人口・貨幣　（1）セー法則的ヴィジョンの場合　（2）「結果」としての農業　（3）人口と貨幣を巡る対立　＜本稿（3），本誌第 83 巻第 1 号（2014 年 6 月）＞

［5］ 小農層解体と工業化：第 8 章～第 10 章　（1）エンクロージャーの意味　（2）商品経済拡大への 2 つの案（3）相対的生産と欲望　（4）「事実と経験」（5）農業主義的商品経済構想との対立点再論　＜本稿（4），本誌第 83 巻第 2 号（2014 年 9 月）＞

＊引用と典拠について

本稿では，ステュアート『原理』からの引用は，小林昇監訳『経済の原理 - 第 1･第 2 編』（名古屋大学出版会，1998 年）により，本文中にその訳書での頁数を記した。必要に応じて付記した原文は，*The works, political, metaphysical, and chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness*…, vol. I, London, 1805 によったものである。

さらに本稿で引用したその他の既発表の拙稿は以下である。「ヘレンシュヴァント－フランス革命期のステュアート主義者－」（『商学論集』第 73 巻 1 号，2004 年 9 月），「ヘレンシュヴァントの経済思想：第 1 ノート－近代以前の経済システムと人口」（同第 73 巻 3 号，2005 年 3 月），「（同）第 2 ノート－近代社会の階級構成論」（同第 74 巻 1 号, 2005 年 10 月），「（同）第 3 ノート－工業化の経済思想（1）」（同第 75 巻 1 号, 2006 年 10 月），「アーサー･ヤングとヘレンシュヴァント」（同第 75 巻 2 号, 2007 年 3 月），「（同）第 4 ノート－工業化の経済思想（2）」（同第 79 巻 2 号，2010 年 11 月），「（同）第 5 ノート－対外貿易論（1）」（同第 80 巻 1 号，2011 年 7 月）。

［6］ 商品経済システムと外国貿易

（1） 本章の課題について

私は前章までで,『原理』第 1 編第 10 章までの内容を主要に論じた。前章の最後に述べたように,すると次の対象はその第 11 章から，具体的にはその章に言う人口原理と employment の関係についてということになるのだが，しかし私の思うに，その前に論じておかねばならない主題がある。本章のタイトルに掲げた，商品経済システムと外国貿易の関係についてである。

本稿全体の基本的な問題意識は，商品経済を単一のシステムと見なしてその展開プロセスを考える,というものであるのは既述の通りである（本稿［1］（4）「本稿の課題について」）。また『原理』の第 1 編と第 2 編とが，trade と industry の明示的な導入とともに，ステュアートの言う「初期商業 infant trade」の段階（クローズド・システム）から「外国貿易」段階（オープン・システム）への展開という意図で大きく区分されているというのも明らかであり，そのため私は，本稿全体のタイトルとして「『経済学原理』第 1 編の分析」という言葉を付したのである。そうすると，一見この外国貿易という問題は本稿の範囲外になるかのように見える。しかしながら，前章で第 10 章の内容に関連して引用した文章（第 20 章）の中に次の一節があったのを想起してほしい。

> 「… 彼ら（農村に滞留する余剰労働力－引用者）は工業に転身し，食物は，その国の生産量が減少するのに比例して，海外から入ってくる。事実と経験がこの主張を証明しているが，一例として私はオランダの場合を挙げよう。そこでは骨の折れる農業のあらゆる分野が排除されていて，ほかの国々から運んでくることができない生産物の生産だけがこの方法で行なわれている。I cite Holland as an example, where every branch of operose agriculture is exploded, except for such productions as cannot be brought from other countries.」（p. 126. 本稿（4），p. 69 を参照。）

商品経済システムによる農村の包摂が進めば，農業においては，輸入代替の不可能なものを除いて「骨の折れる農業」は破砕され exploded，同時にその「骨の折れる種類の農業が有利に行なわれうる他の国々」から食糧を輸入する（したがって工業製品を輸出する），そういう形態での外国貿易が始まるだろう。その実例はオランダに見ることができる，と。

ここには，上に言った第 1 編を大きく規定する問題意識と外国貿易という主題を結ぶある環が描かれているように思われる。一国がその「初期商業」段階（国内市場で完結している状態）を離れ，工業製品の輸出国となって食糧を輸入するようになる（つまり後述する第 2 編の用語で言えば，一つの国民経済が工業製品の輸出国たる「能動的外国貿易 an active foreign trade」の主体に転化し，農産物輸出国たる「受動的外国貿易 a passive foreign trade」の諸国を従えるようになる）のは，単一のシステムとしての商品経済，すなわち一国の「インダストリー」が持つ内的論理の展開の必然的な帰結なのだ，と[105)]。

---

105) ステュアートにおける「能動的貿易」－「受動的貿易」という対概念の意味については，本章（4）で検討する。「能動的貿易」とは，さしあたりは主体的・積極的な輸出貿易といった意味で理解しておいてほしい。

本章では，前章で言及しながら立ち入らなかったこの認識について考えたい。それはつまり，そもそも商品経済システムがなぜ外国貿易の存在を必要とするようになるのか，あるいはそのシステムになぜ外国貿易が生まれるのか，という問いと同義になるということは明らかだろう。すでに本稿（3）の注 85）で触れておいたように，私の思うに，第 1 編の叙述では，ステュアートは第 18 章でその問題への直接の答えを与えている。そこで，順序は前後するが，本章では，それに直接結びつく第 15 章（正確には後述のように第 14 章の末尾）から第 18 章にかけての記述を直接の検討対象とすることから議論を始めたい[106)]。ステュアートは上の引用文で，問題は食糧輸入の必要に関わっており，答えは「事実と経験」から引き出される，としている。私の思うに，彼がその「事実と経験」について述べ，今言った問題への自分なりの答えを出しているのがその部分なのである（なお本稿でまだ取り上げていない第 11 章から第 14 章については，上記の人口原理と employment の関係についての次章とする）。

さらに，このように問題を設定すると，もう一つ考えねばならないことが出てくる。今述べた通り，第 1 編と 2 編との区分はあっても，実際には（能動的）外国貿易の開始までも第 1 編の論述の射程に，つまり本稿で設定している単一の商品経済システムの運動という問題構成の枠内に入ってくるのだとすれば，当然，第 2 編の議論（つまり彼の言う「トレードの 3 段階」のどれかといえば確かに「外国貿易」段階に属する議論）も本稿の対象として含めなければならない，ということである。

結論を言うと，そのように考えてあらためて第 2 編を見ることによって，私は，第 11 章「この均衡がやがて破綻するのはなぜか」と第 12 章「諸国民間の競争について」との間に，一つの論理的な区分線を見ることができるのではないか，と考えるようになった。ステュアートは，その第 12 章で，第 1 編のクローズド・システムの状態から「能動的対外貿易」の主体へと転換した一つの国民経済を，明示的に「国民的競争 national competition」に，つまり同じ立場にある他国との競争関係に入らせる。そして同時に，輸出競争力の維持のための労働力費用上昇の抑止，つまり国内における奢侈の一転した排除などの，「外国貿易」段階に固有に属する論理展開を前面に出してくるだろう。そうすると，『原理』の叙述は，第 1・2 編の区分を越えて第 2 編第 11 章までは，単一の商品経済システムが自らの内的論理の展開として辿る道行き，そういう意味においては継続しており，そこで局面を変える，そう捉えることができるのではないだろうか。

そして実は本稿にとって重要なのは，第 1 編・2 編の区分や「初期商業」・「外国貿易」の区分自体ではなく，その第 2 編 11 章に関わる区分線なのではないか。その区分線上にあるものとは，要するに，一つの国民経済が「能動的対外貿易」の主体＝工業製品の輸出国となり，「受動的対外貿易」の諸国を単独で従えている状態，そうしたものになるだろう。そしてそれは，ステュアートにおいて，本稿の問題意識たる「完結したシステムとしての商品経済」が帰着する終局，いわば本稿のプ

106) 各章のタイトルを掲げておこう。第 15 章「前述の諸原理の，大ブリテンにおける人口状態への適用」，第 16 章「改良のための方策が同じように十分とられているのに，なぜある国々では，他の国々と比べて人口がはるかに多いのか Why are some countries found very populous, in respect of others, equally well calculated for improvement」，第 17 章「豊作と不作とは，どのようにして，またどの程度まで国民に影響を与えるのか」，第 18 章「1 国が人間で満たされるようになる原因と，その結果について」。

ロブレマティークの極点と見なされるものであり，そこへの帰着を必然とする論理が，本稿でタイトルとした「ステュアートの工業化論」の内実をなすものだろう，現時点で私はそう考えている。

以上の理由から，本章での主な検討対象は，上記のように第 1 編第 15 章（加えて第 14 章末尾）から第 18 章にかけての叙述，加えて第 2 編第 11 章までから適宜関連個所を取り出して論ずる，というものになる[107]。

(2)　食糧需要と外国貿易：第 1 編第 15 章～第 18 章

生殖力と農業

本章の課題と検討対象について上記のことを述べた上で，できるだけステュアート自身の論述の順序に即して検討していきたい。その端緒となるのは，第 14 章の最後に（おそらく第 15 章以降への接続という目的で）付け加えられている次の一節である。

> 「私の理解するところでは，ほかのあらゆる動物と同じように，人間の場合にも，生殖能力というものは普通の病気によって生ずるすべての損失を埋め合わせて余りある力をもっている the generative faculty is more than able to repair all losses occasioned by regular diseases。また，これまで一度ならず説明してきたと思うが，食物の欠乏がなければ，増殖は決して停止しえないものである multiplication never can stop but for want of food 。そこで，人間の労働 the labour of man が現在と同量の食物を年々生産し続けることができ，しかも人間を労働させる動機が存在する限り，これまでと同数の人間が養われうるし，さらに 1 組の夫婦から幾百万人を産み出してきた生殖能力は，現在の人数を維持するよりも大きな力を必ず発揮するであろう certainly do more than keep up the stock。」（p. 86.）

ここで見るべきは，ステュアートが，第 3 章で農業以前の採集経済の設定において人口波動のイメージを導きだしていた，人間の「生殖能力 the generative faculty」と食糧量との関係という問題を，

107）ここで述べたことについて，いくつか付言しておきたい。見てのように本章で私は，『原理』の叙述は，第 1 編から第 2 編第 11 章までは，単一の商品経済システムの内的論理の展開という意味で連続しており，第 12 章との間の区分点の論理位相は，一つの国民経済が「能動的対外貿易」の主体へと展開し単独で「受動的対外貿易」の国を従えている状態，というものだ，と述べた。まず，過度に単純化してはならないので言うが，無論それは，第 11 章までの叙述では「国民的競争」は考えられてもいない，それにつながる内容は無い，といった意味ではない。ステュアートにとって，その競争状態に入ることもまた必然･不可避の事柄，というよりもむしろ，すでに眼前の現実であった。私が言いたいのは，彼が商品経済システムの「原理」を論理的に構築する際に，いわばその一階梯としてそのような論理位相を使用したということ，そして固有にその位相に属する内容を分析的に摘出することが可能だろう，ということである。だからこそ彼は，後にも触れるように，例えば第 2 編第 9 章などに多くの先取り的な叙述があっても，「国民的競争」それ自体は第 12 章からの「新しい主題」として設定し直しているのである（p. 214）。

第 2 に，上に私は本章の問題を，商品経済システムになぜ外国貿易が生まれるのか，といった言い方をしたのだが，無論外国貿易なるもの自体は，例えば一攫千金を狙う冒険商人のような輩が単身船に乗って出ていく，というだけでありうるものである。後述するように，ステュアート自身，外国貿易に関する議論をそのような例から始めている。だが問題はそれではなく，商品経済システムの全体的な展開・存立の中に不可欠に組み込まれた外国貿易の成立，ということにあるのをまず強調しておきたい。それは本章のこれからの議論で十分理解されるものと思う。

食物を生産する「人間の労働」つまり農業生産力との関係で語っている，ということである。文意を理解する鍵は，本稿ですでに述べた，彼における「生殖 generation」と「増殖 multiplication」の意味の区別であろう[108)]。生物としての生殖能力つまり出産それ自体は，通常の死亡率を超えた数で起きるだろう。そうすると，「人間の労働が現在と同量の食物を年々生産し続けることができ，しかも人間を労働させる動機が存在する限り」，すなわち一定の農業生産力がそのまま維持されると想定すれば，生殖能力によって，現時点の食糧量で生存し社会を充たしている人口数 the stock を超えて人間が生まれてくることになる。その時，もしその新しい人口量に食糧を供給することができないならば，「増殖」はそこで停止する。

つまり，生殖能力は，採集経済ばかりでなく農業においても，常に人口をその生産力に追いつかせ，凌駕させようとして働く（「増殖」は停止しても「生殖」は停止しない）。そして，もしその凌駕した状態が続くならば，（ここでステュアートは述べていないが）彼がすでに活写していた人口波動が起きるはずである。

このように言うと，我々は後世のマルサスによるいわゆる「過剰人口論」というものをそこに見たくなるだろう。だが言うまでもなく，それはステュアートとは直接には関わりのないことである。後のマルサスは，いわばこれと同様の人間の生殖力と農業一般との関係という論理次元での認識を，彼の思いつきである幾何級数と算術級数という有名な議論によってそのまま普遍化するだろう。だがステュアートはそうはしなかった。彼は，さしあたりの想定として農業生産力に一定の線を引いた上で，人間の「増殖」は生殖力のゆえにその線一杯までは進む，そこまでしか言わなかった。その理由はこれからの議論で明らかになろう。そしてマルサスとの対比も次章で考えよう。さしあたりここでは，その相違点を念頭に置いた上で，ステュアートの言う通りのことを確認し，**第 1 の論点**としておきたい。

その上で続く第 15 章を見よう。その主な内容は，1758 年に発表されたブラケンリッジ博士の人口論説に対する批判である。まず，本章の主題たる外国貿易の存在理由という観点から，私なりにその要約を試みてみる。（以下引用は pp. 89–92. ゴシック体での強調は引用者。）

ブラケンリッジの言うには，「大ブリテン」では，1690 年から 1756 年までの間を見ると，相次いだ戦争での戦死者数と兵役適合年齢者の増加数とが年間ほぼ 8,000 人で拮抗しており，そのため全体として増殖の余地は無い状態である。イングランドだけで言えば，より出生率の高いスコットランドやアイルランドからの移住がなければ人口はむしろ減少するだろう。そうした状況のために，イングランドでは年収穫の 6 分の 1 にあたる量の穀物輸出が起きているのだ，と。

このブラケンリッジの考え方では，このような穀物輸出の理由は，戦死などでの死亡の増加が増殖を阻み，その分農業生産力に余剰が生じたから，そういう理解になるだろう。しかしながら，戦

108) 私は本稿［2］で次のように述べておいた。「社会がその構成員たちの「生殖」によって現れた新たな生命に，その生命を生き長らえさせる生活資料…を安定的に提供できるようになる場合が「増殖」である。つまり彼の言う「増殖」とは，自律的に進行する「生殖」が生み出す追加人口を社会に定着させていくプロセスを伴ったもの，という意味になろう。つまり，この「増殖」という言葉で語られる問題とは，人間の数が何人増えるかとか，どのような速度で増えるかといったことではなく，その人口を要因として含む全体社会の経済成長の機構そのものについてなのだ，ということである。」（本稿（1），p. 104.）

死も移住者も穀物輸出も，個々の事実としてはブランケンリッジの言う通りだとしても，人間の増殖という問題は別様に理解されねばならず，これらの諸事実にも別の因果関係を見ねばならない。

例えばブラケンリッジは，イングランドでは，もし移住者がいないなら人口は減少するだろう，と言う。だが，もし移住者がいないならば，それによって生じたはずの「労働の価格」の上昇によって，「イングランド人がみずから増殖する」ようになっているだろうし，逆に，食糧が外国に輸出されるという事態は，その移住者の存在が「労働の価格」を過度に低下させ，十分に食糧を買えない貧困者を増大させることで起きよう。またブラケンリッジは，戦死者がなければ人口はもっと増大しているだろう，とも言う。確かに国外の戦場での多大な戦死者の数を見ればそう考えたくもなろうが，しかしそのためには，少なくともこの期間の戦時と平時とでは国内での出生 births 数は平時の方が明らかに高い，と言う必要があろう。だがそうした証拠はない。事実としてはっきりしているのは，「我が筆者が海外で失われたと考える人数」は，イングランド人でも移住者でも国内人口の「毎年の増加によってちょうど埋め合わされる」ように推移したということ，つまり，「突然の展開によって多くの成人の生命を奪い，現人口まで減少させる破滅的な戦争の後に」，「人口が数年のうちにもとの水準に回復し，それから改めて停止する numbers should in a few years get up to the former standard, and then stop a-new」という動きを示してきた，ということ以外ではないのである。すると，それを説明する理由は，「**これらの国民が自国の生活資料の許す最大限まで人間を満たす those nations are stocked to the full proportion of their subsistence** ということ以外に，なにかありうるだろうか」。

そして，このように考えると，イングランドで食糧輸出が行われているということは，農業生産力に対して人口が少ないということをまったく意味していない，というのが分かる。というのは，「輸出は国内需要が満たされている」ことは示しても，「住民が十分に栄養を与えられていること」の証明にはならないから，つまり「輸出価格ではそれ以上を購買できない」人々がいるからである。その食糧輸出は，「生活資料の不足のために死亡する」人々がいるにもかかわらず行われているのであり，その人口は「やはり食物不足のために停滞している it still stopt for want of food」のである。「**彼らが購買できるならば，生き延びて増殖するであろうから，おそらく穀物が輸出されることもまったくないであろう they would live and multiply, and no grain perhaps would be exported**。これが私の議論の明白な帰結 a plain consequence of my reasoning」である，と。

以上は私なりの要約である。人間の生殖能力は常にその国の農業生産力の限度まで「増殖」を進めさせるだろう。そうすると本来，食糧を輸出する，つまり食糧を自ら外国に売りに行くという，（上に引いた第 2 編の言葉で言う）外国貿易としての「能動的」な性格をそれがもちうるはずはないであろう。ステュアートは，それが，彼の考える商品経済システムの原理の「明白な帰結」である，と言うのである。

さらに彼は第 17 章で，この食糧輸出の問題を，穀物の豊凶作という食糧生産の年々の動態との関係でさらに「経験」的に検証する。結論的な事柄だけ簡単に要約すればこうであろう。（以下引用は pp. 100-105 から。ゴシック体での強調は引用者。）

豊凶による収穫量や価格の変動については過度に誇張された見方も流布してはいるが，ヨーロッパのたいていの国では，その国で生産される食物は大方その国の住民によって消費され，輸出量は

国内消費に対して小さな割合しか持っていない。世界中で最も穀物の収穫が多い国でも，国内消費の3分の1も輸出に回せる国はないだろう。そして，ここから分かることは，「どんな人為的な政策を用いようとも，**住民の数がだいたい通常の年の平均的生産高に到達するまでは，その増殖を妨げることはできない** all the policy of man would not be able to prevent the multiplication of them, until they arose nearly up to the mean proportion of the produce in ordinary years」ということにほかならない。すなわち，どの国でも人口量はこの「通常の年の平均的生産高」の水準に照応して成立するのであり，その平均収量での食糧水準と人口との「両者の均衡がほぼ保たれるようになるまでは増殖が停止することは決してない multiplication will never stop until the balance comes to be nearly even」のだ，と。

さて，以上第15章と17章の内容の要約をしてみた。再度言うが，私は単一の商品経済システムの展開の原理を考えている。その点での今見たステュアートの主張の要点とは，人間は生殖力のゆえに食糧生産の限度まで増殖するものであり，したがって農業が自らそのシステムの圏外に余剰を輸出するようになる，つまり対外貿易における「能動的」な性質を自ずと帯びることはない，そのように言っていいと思われる（したがってステュアートは第2編で，本来農業輸出は「受動的」な性質でしか生じないと言うだろうが，それは後に見る）。これを**第2の論点**として確認しよう。

農業主義批判と外国貿易

さて，それでは商品経済システムの中には「能動的」な外国貿易はどうして生じるのか，と問われるだろう。そして我々は，ステュアートがその問いに一定の答えを与えている第18章に目を向けることができる（まだ述べていない第16章は後述する）。この章は，私はすでに本稿で便宜的にごく一部だけを取り出して利用したものである（とくに本稿［4］（2）参照）。あらためて検討するにあたり，本稿で既述の内容との関連を含め，まず章全体の主題について述べておくべきだろう。

この章のタイトルは，「1国が人間で満たされるようになる原因と，その結果について Of the causes and consequences of a country's being fully peopled.」というものである。この fully peopled な状態とは，ステュアートの定義では，「どんな原因からであっても，1国の住民が充満して，土地が，その時の肥沃度では，住民が常食にするのを好むような食物を量的に十分に供給できなくなる a country's being so peopled, no matter from what cause, that the soil, in its actual state of fertility, refuses to supply a sufficient quantity of such food as the inhabitants incline to live upon」状態，とされている（p. 109）。上記「第1の論点」に見たように，すでにステュアートは，生殖能力は，増殖つまりその社会が安定して維持できる人口量の増大を通常の食糧供給量の限度まで進ませると述べていた。ここで言われている fully peopled な状態とは，まず第一義的には，増殖がその点まで進んだ状態，人口量がその時点（「その時の肥沃度」[109]）での国内農業で生産できる食糧供給の限度に達している，という意味になろう。すると，当然2つの道がありうるはずである。つまり，国内農業の生産力をここに言う「その時の肥沃度」（加えて今注109）に言ったようにその時点の既耕地面積）以上に引き上げるか，あるいは外国からの食糧輸入を始めるか，である。そしてこの18章の主題は，その

[109] より正確には，ステュアート自身が別の場所で述べているように，「土地の広さと肥沃度」（p. 457）である。どちらも可変量であるのは言うまでもない。

後者の道が採られた国，つまり，オランダを典型例として「海外から生活資料を求めることをその利益としている国民の状況 the situation of a people, who find it their interest to seek for subsistence from abroad」について論じることだ，という（p. 106）[110]。

我々は，おそらくこのように言うと，オランダのような国は国土が絶対的に狭いのだから他に手段はないだろうといった議論を思いがちだろう。だが，少なくともこの箇所でのステュアートの意図はそのようなことではなかった。彼が，今言ったこの章の主題を「例証する illustrate」という目的でまず語り始めるのが，上に述べた本稿での既述の事柄，すなわち本稿［4］（2）ですでに論じた「増殖が農業の有効な原因なのか，それとも農業が増殖のそれなのか」という問題，及びその答えたる「増殖が原因であり，農業はその結果である」という命題なのである。私はその部分についてはすでに引用と分析を行っているので，ここで繰り返すことはしまい。これから考えなければならないのは，この「例証」の中でのその部分の直接の続き（同一パラグラフ内の前半と後半）を成す次の部分である。

「他方で大地の自生的な果実は，先の仮定に見られるように，一定の条件をつけられた増殖の原因と考えてよいと私は思う。この場合には，等価物はいっさい求められないからである。大地は，その果実が消費されようがされまいが，それを生産する。人類は無償で，また労働もしないで，それで養われるのであるから，果実の存在がそれを消費するはずの人間の出生に先行する。最初に食を与えられる者が，その活力を食物から引き出し，その増殖を活力から引き出す。生まれた者は母なる大地の上で無償で生活し，すべての産物が消費されてしまうまで増殖する。そうなると増殖が停止する。このことについてはすでに述べた通りである。*しかし農業を導入すれば but establish agriculture*，増殖があらたに進行するであろう。そこで，わが読者は言うだろう。自生的な果実が最初の増殖の原因であったように，農業こそがこのあらたな増殖の原因である，と。これはまことに自然な推論ではあるが，われわれが証明の努力を重ねてきたことと真っ向から対立するように思われる。だが，この結び目は簡単に解ける。われわれは農業の存在がなぜ人間の勤労に依存するのか，そしてまた，この勤労がな

[110] この fully peopled な状態という概念について，ステュアートが第 18 章で加えている説明は次のようなものである。「1 国が人間で満たされる A country may be fully peopled（われわれがこの用語を理解する意味では）には，いくつかの異なったやり方がありうる。ある場合にはそれは 600 万人でいっぱいになることもあり，またあるときには，その土地にそれ以上の耕作や改良が行なわれることなく without the soil's being better cultivated or improved，800 万人ないし 900 万人でさえも容易に維持しうることもある。他方で，ある国には 2,000 万人でも容易に維持することができるのに，土地が改良されたことによって 1,500 万人でも過剰になることもある a country may maintain twenty millions with ease, and by being improved as to the soil, become overstocked with fifteen millions。」つまりそれは，土地の耕作状態や「改良」の進み方（なおここでの，「土地が改良されたことによって」2,000 万人いた人口が 1,500 万で過剰になった，という一見奇妙に見える例については，その「改良」という用語について述べた本稿（4）の注 93）を参照されたい），さらには生活習慣の違い，例えばイングランド人が肉，フランス人がパン，ドイツ人が塩漬けキャベツを多く食べて生きている，といったことからでも違ってくるだろうし，「読者はそれを好きなように展開することもできる」（以上引用は p. 109）。つまりそれは，例えば国土の広さなどから一様に定まるようなものではなく，農業状態，人口量，生活習慣など多様な要因の組み合わせ，つまり本章のはじめに引いた文章の言葉で言えば，各国ごとの「事実と経験」によるものである。

ぜ*農業を導入*するただ一つの手段なのか how this industry is the only means *of establishing agriculture* を見てきた。さて，この勤労は主として自分の子供たちを扶養するという動機によって促進されるのであるから，子供の出産 the procreation が人間の労働を開始させる最初の，または少なくとも最も明白な政治的原因と考えなければならないのであり，したがってそれは農業に先行すると考えることができる。ところが他方では，大地の自生的な産物はその量が少なく，しかも人間とはまったく無関係に生じるのだから，ちょうど，若者にわずかな金を与えて，勤労に励み身代を築く道に乗り出させるのと同様に，いわば自然によって与えられたもののように思われる。このわずかな金で彼は活動を始めるが，財を作るのには彼の勤労しかない。**この例証によって明らかなように，食物に対する需要が国内からよりも，海外からいっそう容易に充足されうるとすれば，人口を維持するのは，*国内農業ではなく，勤労*によって産み出された外国の生活資料であって，この人々が，今度は農民に，同朋が外国人に与えている等価物を手に入れたいという欲望を起こさせて，国内農業の発展を促すことになると思われる。**From this illustration it appears, that if the demand for food can be more readily supplied from abroad than from home, it will be the foreign subsistence, which will preserve numbers, produced from *industry*, not from *domestic agriculture* ; and these numbers will, in their turn, produce an advancement of it at home, by inspiring a desire in the husbandman to acquire the equivalent which their countrymen give to strangers.」（pp. 107–108. ゴシック体による強調は引用者。）

おそらく一読して分かりにくい点があるかとも思われるが（私はここでの邦訳書の訳文に少し異論があるが，それは後述する），見ての通りステュアートは，この「例証」によって外国からの食糧輸入が始まる根拠を述べているのである。「例証」の前半たる既述の上記命題が，本稿で農業主義的商品経済構想と呼んだ，人間の増殖を農業生産の増大の結果として農業拡大の優先を主張する思想形態への反駁を意図したものだった，ということはすでに述べた通りである。そして今引いたこの後半部分においても，私がゴシック体にして原文を付した箇所までは，その農業主義への批判にほかならない。彼は，この「例証」によって，商品経済システムと外国貿易の関係という問題でのその思想形態の認識の誤り，それも，上記命題が示す近代社会の人口増殖原理の展開（本稿で「増殖の貨幣経済的形態」と呼んだプロセス）に関連した誤りを述べようとしているのである。この部分について，私なりにできるだけ明瞭な解説を与えるよう努めてみよう。

まず想起しなければならないのは，この文中では当然の前提のように扱われている，一旦開始した増殖が停止し，さらに再開する論理である。ステュアートは，ここではそれを，自生的な産物による生活での増殖の停止から「*農業の導入 establish agriculture*」による増殖の再開へという，一見2段階のような形で述べている。しかしながら，すでに本稿で第5・6章の論述に即して検討したように，実際にはその論理はもっと複雑だった。最初の自生的産物で生きている状態から最終的な増殖の再開までには都合3度の停止と再開が含まれていたのである。要約すれば以下のように。

① 自生的産物で生きる状態での増殖の停止（食糧量の一定線をはさんでの人口波動の繰り返し＝採集経済が陥る増殖の「絶対的不能」）から，そこに農業のみを導入すること（等価物との交換を目的にしない「絶対的農業」の導入）による再開へ

② ①の状態が再び生殖力に追いつかれることでの停止（＝剰余生産をしない「絶対的農業」が

陥る「社会的不能」）から，農業者に等価物を提供するフリー・ハンズの形成（「相対的農業」の開始）による再開へ

③　②が農業者の必要工業製品への消費欲望の飽和によって「均衡」状態になることでの停止（＝それが「貨幣も奢侈的な技芸もまだ知られていない」局面であるための「社会的不能」）から，奢侈と貨幣の導入による再開へ

つまり，上に引いた文章で言われている増殖の停止は①の停止を，「*農業の導入 establish agriculture*」とイタリック体で書かれているものでの再開は③のそれを指しているものなのである[111]。その点を踏まえて上記の文章の内容を私なりに敷衍して説明すれば，こうなるだろう。

確かに①での増殖の停止は，農業の「導入 introduction」（上掲注 111）参照）による食糧の増産が先行することで打開された。また②でも，農業者がフリー・ハンズへ提供する余剰食糧を増大させたことで増殖が再開されたと言える（本稿で言う［因果連関 A］）。そしてそこから農業主義は，農業が増殖の原因である，つまり農業＝食糧生産はそれ自体で人口（自らへの需要）を創出し増大させて自立できる，と主張するのである。そうすると，②で生ずる「均衡」と増殖は両立する，つまり総人口は農業生産とともに増大して，均衡を破壊することのない工業の拡大が可能になり，③で言うような「社会的不能」になることはない，と見なされるだろう。そして，（この章で言う）一国が fully peopled な状態になるということの原因は，ひとえに国内農業に不当な阻害が加えられていて，住民の自然的な増殖を支えられない不自然な状態になったから，ということに求められるだろう。そして（凶作時の緊急避難的な場合などは除いても）食糧を外国に求めるのを常態化する，などというのは許しがたい倒錯に映るはずである。

だがそれは誤っている。なぜなら，②での「均衡」は，工業部門での増殖が農業生産に先行して進むことから必然的に破壊されるからである。すでに述べたように人間の生殖力＝「子供の出産」は農業生産の枠を超えていくだろう（上記「第 1 の論点」）。もっとも，生まれても生きられずに死ぬだけなら（「腹が減っている者なら誰でも需要する」類の需要だけなら）何も変化はないだろうが，奢侈と貨幣の働きは，工業部門の人々の生殖力を「増殖」に，つまり有効需要の増大を伴った人口増加に転換する。そして農業はその増殖の「結果」としてのみ拡大が可能になる（本稿で言う［因果連関 C］）。それが，ここで言う industry を「唯一の手段」として establish（普通に「確立する」という言葉にしておきたい）される農業の性格なのである。商品経済システムの確立には，人間の増殖原理の転換（［因果連関 A］あるいは B から C へのそれ）が不可欠の契機として含まれている。その点を誤解することは，若者が最初のわずかな元手で生きている状態と，その元手を使って新しく作りだした財産の上で生きるのとを同じだと言うに等しいだろう。

このように，商品経済システムは，工業人口がその時点の農業生産力（食糧供給量）を超えて先行的に増殖することをその成長のプロセスの必然的な一環としている。つまり「このあらたな増殖」によって生じるのは，「***国内農業*からではなく，*工業*から生み出される人口量** numbers, produced

111）本稿（1）の注 41）で指摘していたことであるが，①での農業の導入＝絶対的農業の導入の方を，第 4 章でステュアートは普通にローマン体で「the introduction of agriculture」と書いていた。邦訳書ではどちらも同じく「導入する」という訳語になっているが，意味が異なるので注意を要する。

from *industry*, not from *domestic agriculture*」[112] なのである。その増殖の規模，すなわちその際に起きる「食糧不足」（食糧需給の不均衡）の度合いは，その時点の国内農業の状況とは何の関係もない。国内農業によって解決・調整できる規模になる，という保障などないであろう。そうすると，その際にもしも「食物に対する需要が国内からよりも，海外からいっそう容易に充足されうる」という事情があるのならば[113]，その食糧への有効需要を外国に向ける，外国からの食糧輸入を始めるということには，何か咎め立てするような不自然なことがあるだろうか。

以上私なりに上記引用箇所への解説を与えてみた。商品経済システムはその成長の仕組みの中に，工業人口がその時点の農業生産力（食糧供給量）を超えて先行的に増殖するプロセス，つまりは食糧需給の不均衡が発生するプロセスを必然的な一環として組み込んでいる，すなわち，増殖に対する食糧という不可欠な財の不足として生じる不均衡を速やかに調節する必要性を抱え込んでいるであろう。そこに，このシステムが「能動的」な外国貿易を内部に生じさせる基本的な根拠がある。私の思うに，それがこの箇所でのステュアートの主張の要点である。上にならい，これを**第 3 の論点**として確認しておきたい。

食糧需要と外国貿易

さて私は今，商品経済システムに外国貿易が発生する経緯を追っている。ここで，まだ触れていない第 16 章に目を向けた上で，ここまでに述べた内容を整理してみよう。この問題に答えるためには，そのシステムが通常あるいは正常にはどのように進行するのかを明確にしておく必要があるだろう。ステュアートは第 16 章でその描写を与えている。この章はコンテキストが複雑で内容を要約しづらいが，彼自身がその要約だとする文章を第 21 章から引けば私の用は足りよう。

> 「商工業 trade and industry の確立は，土地から余分な人間を清掃する purging the land of superfluous mouths ことによって，このような農業の濫用 misapplication をおのずから是正し，そしてそれによって農業を本来のあるべき姿に，すなわち剰余 surplus を提供することを目指した営業に転換させ，この剰余がすべての勤労者の労働 the labour of all the industrious に対して販売されるようになる。自分の勤労によって生活しなければならない自由な人間 free men who must live by their industry の一部を勤勉な農業者 laborious farmers とし，他の一部を創意ある職人と製造業者 ingenious tradesmen and manufacturers とにすることによって，彼らのあいだに全般的な依存関係のきずなを強固にすることができるのは，これをおいてほかにない。増殖と農業とがその頂点にまで到達するのは，**この 2 つの階級間の均衡の振動** the vibration of the balance between these two classes によってである。**工業があまりにも急速に進行するときは，フリー・ハンズがその水準を超えて増殖して，天秤は彼らの方に傾く。これは食物の価格を騰貴させて，農業に新たな刺激を与える。これが再び一層重くなると，食物は豊富で安価になって，人口は改めて増加する。**When industry goes on too fast, free hands multiply above the standard, that is, their scale sinks ; this raises the price of food, and gives an additional encouragement to

112) これは邦訳書の訳文とは別の私の解釈である。

113) この章の主題の「海外から生活資料を求めることをその利益としている find it their interest to seek for subsistence from abroad」という表現を想起しよう。

agriculture : when this again becomes the more weighty, food becomes plentiful and cheap, then numbers augment a-new.」（p. 146. 強調は引用者。）

見てのように，彼がここで述べている「2 つの階級の間の均衡の振動」の内容は，本稿で「増殖の貨幣経済的形態」と呼んだプロセスのステュアート自身による端的な要約だと考えればいいだろう。本稿ではもう説明を繰り返す必要はあるまい。そして今考えている問題とは，その言葉を使えば次のように表現されよう。

商品経済システムの成長プロセスを示す「2 つの階級間の均衡の振動」は，当然まずは 1 国内での農工関係として成立する。その際，農業生産が人口増殖を上回って余剰の輸出を生み出すというのは，既述の生殖力の作用で否定されるとしても（上記論点第 1・第 2），食糧の不足という需給の不均衡（論点第 3）が，食物価格の上昇→国内農業の additional な活動の発生という経路による生産増と価格低下でその都度順調に補われていくのならば，それで「天秤」のフリー・ハンズの側への傾きの調節が果たされ，最初の振動を同じ形で繰り返していけばいいだけになるだろう。ではそこで，いかにして外国貿易という別種の関係性が必要となり，そのシステムの内に組み入れられることになるのか，と。

今まで述べたことから言えるのは，ステュアートは，それは全体としては「事実と経験」によるものとした上で（本章はじめの引用文），上記に引いた第 18 章の文章にあるように，具体的には 2 つの条件に，つまり第 1 に，その国が彼の言う fully peopled な状態になっているという前提，さらに第 2 に，そこでもしも「食物に対する需要が国内からよりも，海外からいっそう容易に充足されうるとすれば」という if 節，その 2 点に委ねた，ということである。そこでこの条件について少し立ち入って考えてみよう。

まず第 1 の fully peopled な状態ということについてである。これについてはすでに上記で，「どんな原因からであっても，1 国の住民が充満して，土地が，その時の肥沃度では，住民が常食にするのを好むような食物を量的に十分に供給できなくなる」状態という定義が与えられているのを見た。また一方，今上に述べたように，そこに言う「食物を量的に十分に供給できなくなる」状態，つまり食糧不足＝食糧価格の上昇ということそれ自体は「2 つの階級の間の均衡の振動」の中の一部なのであり，それが「新たな刺激」となって国内農業の増産と価格低下が生じるならば，このシステムはそのまま自己拡大していくだろう。したがって，この fully peopled なる状態になっているということは，国内農業の事情でその自己拡大プロセスが働かなくなる，つまりその時点の国内農業によっては「天秤」を元にもとに戻すだけの食糧価格の引き下げができなくなっている，ということを意味するはずである。ではなぜそのような事態が起きるのだろうか。

これについてステュアートは，第 2 編第 11 章「この均衡がやがて破綻するのはなぜか」で一つの明瞭な説明を与えている。

「われわれは勤労の進展の跡をたどって，この勤労が労働への主要な誘因である生活資料の増大といかにして歩調を合せて進むのかということを示しておいた。ところで，食糧の増大は土地と関連をもっており，土地が，収益の価値と釣り合った費用で生産することができるようになっている限りは，農

業は疑いもなくあらゆる工業国において増進するであろう Now the augmentation of food is relative to the soil, and as long as this can be brought to produce, at an expence proportioned to the value of the returns, agriculture, without any doubt, will go forward in every country of industry。しかし農業の拡大が追加的費用を要するようになって，生活資料のきまった価格では，自然の収益をもってしてはこの費用を支弁できなくなると，農業は停止するようになり，したがってまた，勤労の諸結果が少しばかりの困難には耐えてそれを増進させるということがなければ，人口も同様に停止するようになるであろう But so soon as the progress of agriculture demands an additional expence, which the natural return, at the stated prices of subsistence, will not defray, agriculture comes to a stop, and so would numbers, did not the consequences of industry push them forward, in spite of small difficulties。だが私に言わせれば，この場合，勤労者 The industrious は依然として増殖し続けるのであって，その結果として食糧は不足するようになり，住民はそれを求めて競争を始めるのである。／これは偶然的な結果などではない。それは免れがたい結果なのである。…」（p. 209.）

言うまでもなく，かつてシュンペーターが『経済分析の歴史』で，ステュアートにおける農業の収穫逓減の認識を指摘した根拠となる箇所であろう。無論その概念自体がスミス以降のいわゆる古典派経済学の中でどういう意味を持ったかは本稿の問題ではない。ここでは，この記述内容は，本章（1）で述べたその章の位置からしても，本稿で考えている単一の商品経済システムを想定していると考えうること，そしてステュアートが，そこでの農業の増産 the progress of agriculture は，やがてより収益率の劣る土壌・地質 the soil へと農地が拡大することでしか進まなくなり，食糧価格の上昇を止められなくなる，と考えていること，その 2 点を確認すればよい。確かに時々の工業の成長が価格上昇を補えるほどならば，「少しばかりの困難には耐えて」この完結したシステムがそのまま成長を続けることはあろうが，それでもこの食糧価格の上昇傾向それ自体は，国土の広さとか肥沃さなどでの程度や速度の違いはあろうと，どの国でもあたかも地下水流のように進んでいくものだろう。すると，上記論点 3 で述べたように，その状況下のどこかで，食糧を求める有効需要は，国境を超えてでもより安い価格を捜しに，つまり上の第 2 の条件たる if 節を満たしてくれる相手を捜しに行き始めよう。事態は次のように進行する。

「人間で満たされている国 The country fully stocked がこの食物と交換に提供できるものは，フリー・ハンズの勤労による剰余しかない。というのは，農業者の剰余はその社会で消費されると考えられるからである。…／したがって，勤労の余剰は輸出の主要な部分を構成するに違いない。そして，人間で満たされている国の周囲に穀物や各種の生活資料の豊富な他の国があり，そこではその住民が優雅な嗜好をもって，勤勉な隣人から製造品や洗練された品物を熱心に手に入れたがっているものとすれば，そのような国々との貿易は，それ自身の土地の生産物との関連で見れば人間が充満しているはずの，こちらの国の住民を著しく増加させることは確かである。しかも，新たな住民の増加というのは製造業者についてだけ生ずるのであって，農民についてではない the additional inhabitants will increase the number of manufacturers only, not of husbandmen。オランダの場合がそうであり，また自由ではあるが狭い市域しかない多くの商業都市の場合がそうである。」（p. 110.）

工業部門に生じる人口圧力と食糧需要の超過は，「農業者 farmers の剰余」ではなく「勤労の剰余 The superfluity of industry」を買ってくれる相手を捜し求める。その相手が実際に見つかり，上記 if 節が現実になった時に[114]，商品経済システムに外国貿易が生まれる，それも，このシステムの存続にとって是が非でも必要不可欠な性質のものとして生まれ，組み込まれるだろう[115]。

今上掲注 114）でも触れたように，ステュアートによれば，その組み込みの地点，つまり上記の2つの条件が合致する地点がいつどのようにして訪れるのかは，各国毎の多様な事情，「事実と経験」が決めるだろう。オランダは無論その地点を過ぎているわけだが，詳しくは注116）[116]で見るように，彼は，イングランドは当面食糧輸入をする必要はない，と認めている。しかしながら，現状のヨーロッパ諸国のように一定の領域を国境で括っているものを考える限り，人口と農業は必ずや衝突せざるをえなくなる，このいわば**人口と農業の飽和点は**必ずやって来る，ステュアートはそう考えているのではないだろうか。オランダや「自由ではあるが狭い市域しかない多くの商業都市」は，他よりも早くその点に達したのだ，と。

そしてこの飽和点を一旦通過してしまえば，つまり彼の言う「外国貿易」段階への実際の移行が行なわれてしまえば，システムはそれに応じて自らの姿を変えるだろう。外国から新しく入って来る食糧がこのシステム内の増殖を支えることになり[117]，上記引用文にあるように，それは国内農業とは関わりなく「製造業者についてだけ」人口を増やしていく。その下での国内の農工関係を，ステュアートが次のように描いているのはすでに上記で見たところである。

---

114) 国内の食糧価格がどれほど上昇しようと，他により有利な入手先が見出されないならば，それは支払われねばならなくなるだけであって，その時がいつどのようにしてやって来るかは「経験」の問題であろう。だが一方で，もしその時が来ないならば，ステュアートの言うように，やがてとくに低価格の食品では奪い合いのような「競争」が起き，さらにそれも支払えないとなれば，人口増殖が停止するだろう。それに関する具体的な叙述は第2編にあり，後述する。

115) 本章上掲注 107）の第2として述べたことを想起してほしい。

116) いわゆる著作集版には，第1編第17章に，ステュアートが『原理』初版後に読んだチャールズ・スミスとアーサー・ヤングの著書についてのコメントが付記されている。今言っているのは，彼がヤングから得た知見として述べている次の事柄である。イングランドでは「今世紀の初頭以来の生活資料の価格がどんなに高い年でも，最下層の製造業者にしろ，日雇い労働者にしろ，私が見てきたヨーロッパのあらゆる国において，彼らと同じ階層に属する大多数の人びとが実際に経験している程度と比べて，よりよい生活を送っている」，つまり「輸入が必要になるほど価格が高騰したことは決してなかった」。してみると，「事態がこういう状況にある限り，大ブリテンの支配が及んでいない*海外*の諸国民 *foreign* nations, not under the dominion of Great Britain からの生活資料の輸入は，すべて完全に停止されるべきだ」と結論される，と（pp. 102, 105-106）。

つまり，穀物輸出の必然までは認めないが，イングランドについては，少なくとも当面（「事態がこういう状況にある限り」）は，国内の工業発展と農業の拡大との「2つの階級の間の均衡」が可能だと見なしたように思われる。ただし何とも微妙な形で，「大ブリテンの支配」下にある「*海外の*」植民地での食糧生産が含み込まれていることには目を止めておこう。もしも，今言った国内での農工の「均衡」が必ずや可能だと前提するならば，そうした植民地がシステム内の正当な構成要素であるかのように見えてくる，ここにわずかに顔を出しているのはそういう問題かもしれない。

117) 第2編第9章にある次の一文を引いておこう。「国内の住民を養っていくためには食糧をぜひとも外国から求めなくてはならないということが，ひとたび1国の格率として定められてしまうと，穀物貿易は相当の規模に達し，同時に，避けられなくて，規則的で，しかも永続的になる。」（p. 199.）なおこの章については後述で検討対象にする。

「食物に対する需要が国内からよりも，海外からいっそう容易に充足されうるとすれば，*国内農業*からではなく*工業*から生まれる人口量を維持するのは，外国の生活資料であって，この人々が，今度は農民に，同朋が外国人に与えている等価物を手に入れたいという欲望を起こさせて，国内農業の発展を促すことになると思われる。」（p. 108.）（これは，上掲注 112）で言ったように，邦訳書の訳文を一部私見で変更したものである。）

ここで言われる農民の等価物への欲望の喚起云々ということについては，本稿ではもう説明する必要はないだろう。ここでステュアートは，このシステム内の農業の自立性の最後の一片を剥ぎ取ろうとしているようである。彼の言う通り工業が成長プロセスを先導するとしても，農業がその成長の作りだす人口水準まで供給量を拡大させること，つまり一旦工業に傾いた「天秤」の傾きを農業が自らの拡大によって元に戻し，均衡を回復させるということ，それ自体はどこまでも変わらない必須の要請である。一国システムを考える限り，その役割は国内農業のものであり，それは独自の拡大の必然性を保って均衡の一方の比重を占め続けるだろう。しかし，必然的に生ずる食糧需要の超過と上記のステュアートなりの収穫逓減の進行の中で，どこかの時点で，国内農業よりも「一層容易に充足される」外国からの食糧がその均衡の一部に入り込んでこずにはいまい。確かに国内農業はそのために流出する貨幣を自分に取り戻そうと努めるだろう。だが既述の通りそれは，「ほかの国々から運んでくることができない生産物」でもない限り[118]，「骨の折れる農業のあらゆる分野」を切り捨てていくという道以外にはなりえまい。こうしてステュアートは次のように言う。

「われわれの観点は，**生活資料に対する需要が外国にまで広がること a demand for subsistence extending itself to foreign countries** から生ずる自然的な結果を検討することである。これを私は，外国貿易にとってだけでなく，国内産業にとっての母体でもあると考える。この 2 つのことは，やがて第 2 編において扱われることになる This I take to be the mother of industry at home, as well as of trade abroad ; two objects which come to be treated of in the second book。」（pp. 108-109. 強調は引用者。）

外国にまで広がる（自らを広げていく）食糧需要, その「母」は 2 人の子供を産む。外国貿易（第 2 編で言う「能動的外国貿易」）と，その貿易による食糧輸入の上で増殖する工業である。この兄弟が行なうこと，つまり工業製品輸出という貿易は，決してたまたま余剰や比較優位があるから生じる，といったものではない。それは，そもそも商品経済システム（その下にある国民）は，工業製品のそうした余剰や輸出上の優位を作って輸出を実現させないことには存続できなくなるがゆえに生じるものなのである。その兄弟が第 2 編の主役となるだろう。

(3) 商品経済システムのオランダ・モデル

前節では主に第 1 編を対象に述べた。それを踏まえて第 2 編を考えたいが，ここでそのための一

[118] もう一つ除かれるのは，例えば特定の地域の「生糸や高級なぶどう酒」などのように，「それを生産する国よりもほかの国において高い価値で評価される」類の作物生産である（p. 110）。

種の作業仮説となることを提示しておきたい。私は，本章でここまでに見た内容からは，ステュアートが想定している，第1編での完結した商品経済システムの内的論理の展開の必然的な帰着点，言い換えれば，第2編で語られる現実の商品経済システムの主体となるもののいわば原基構造とでも言うべきものを取り出すことができるのではないか，と考えている。それは，私の思うに，上に引いた第1編第18章の「人間で満たされている fully peopled」国に関する記述や，以下に引くその第18章の要約の中の一節でのオランダへの言及の仕方などからして，オランダ・モデルと呼んでいいのではないかと思われるものである。

「…勤勉な国民は海外から新たに＜食糧の＞供給を増やし，彼らの労働の生産物を外国人に提供することを通じて，さらに＜食物の輸入を＞続け，人口を増加させていく。これはオランダの場合である。この方式が続行されると，やがて国内の諸々の濫用が労働の価格を騰貴させるであろう。全人類のための女教師とも言うべき海外の経験は，外来者に自分自身の長所を利用するようにと教えてくれるのである。... the industrious bring an additional supply from abroad, and by furnishing strangers with the produce of their labour, they still go on and increase in numbers.　This is the case of Holland : and this scheme will go on, until abuses at home raise the price of labour ; and experience abroad, that universal school-mistress, teaches foreigners to profit of their own advantages.」(p. 147. なお＜＞内は邦訳書での補足である。)

本章（1）で述べた通り，この引用文後半でステュアートが言おうとしていると思われる，国民生活への奢侈の浸透と労働力費用の上昇による輸出競争力の低下といった事柄は，本稿の直接の関心事ではない[119)]。問題は，ここで彼が the case of Holland と呼ぶものの中にある食糧供給と増殖の在り方なのである。私は上記で，彼にとってのオランダとは，その領域の狭さも一要因としつつ，既述の人口と農業の飽和点をいち早く通過した国，一国システムがいつか立ち至るはずのその飽和点をいち早く「経験」した近代国家という意味を持っていたのではないか，と述べた。そして私がここであえてオランダ・モデルと呼んでいるものの意味は，なによりも，商品経済システムの展開を，オランダのようにその人口と農業の飽和点を通過したところで捉える，ということにある。

したがってそのモデルには，上記の食糧供給を国外に求める必要から生まれた2人の兄弟，輸出品を生産する工業部門と，その製品を輸出する外国貿易とが，はじめからシステムの存続を左右する中枢に位置している。もちろん食糧自給がゼロになるものではなく，工業部門への食糧供給は国内・国外双方から行なわれ，同じく工業生産も国内向けと国外向けの両方があるだろう。したがって，本稿ですでに述べた，ステュアートにとって成長の動態を作りだす「富者」の「奢侈」（本稿［3］を参照のこと）も国内・国外の両方から構成されるはずである。しかし農産物輸入によって国内農業はむしろ縮小過程にあり，成長の牽引は輸出工業に純化される。また食糧自給の実際の量的比重は問題ではなく（同じく本稿［3］の（7）を参照），ただ全体の食糧価格の動向にとって国外からの食糧輸入が無視できない程度にある，というだけでよかろう。モデルの構成要素として必要なの

119) またここで，「海外の経験」という「全人類のための女教師」が教えると言われるのは，オランダ人の国民性たる質素な生活の堅持と労働へのいそしみといったことではないかと思うのだが，それについては次の注120）で触れる。

はそれだけである[120]。

確かに，そもそもオランダを近代経済のモデルにするという思考は，資本制の成立という観点からはなじまない，ということを我々はよく知っていよう。しかしそれは無論ステュアート自身にとっての問題ではない。彼が批判する農業主義は，農業＝食糧生産はそれ自体で人口を創出すると考えて上記のような飽和点の存在そのものを否定するだろう[121]。だがステュアートは，農業主義との対抗の上で，むしろその飽和点を通過した地点に，近代経済の現実を原理的に理解するためのメルクマールを置こうとしたのではないだろうか。

私の思うに，彼が批判する農業主義の土台には，単一のシステム内での完結した均衡空間を想定するモデル（はじめからそれを実在とするモデル）が接続するだろう[122]。一方ステュアートの取った方向は，まずそのような実在論的な均衡空間の観念を拒否する，というものだったのではないか。彼の近代経済は，システムの存続の要を工業製品の輸出の成否に置き，それに端を発する不均衡要因が散りばめられている。そして完成した均衡空間は極めて人為的な調整（ディリジズム）の果てにしか仄見えてこないものとなるだろう。以上が，この仮説の内容である。

(4)「受動的貿易」と農産物輸出：第 2 編第 5 章・第 6 章

次に，上にオランダ･モデルと呼んだものを念頭に置いた上で，第 2 編に目を向けたい。本章（1）で述べた通り，検討対象の範囲は第 11 章までである。ステュアートは，その第 1 章から第 8 章にかけてで，あらためてトレードとインダストリーという概念を明示して定義し，さらに需要･価格･

120) 議論を過度に単純化させないために，2 点付言しておきたい。第 1 に，これにオランダ・モデルという言葉を使ったのはステュアートが主にオランダから実例を引いているということからなのだが，当然ながら，だからといってその国のすべてがモデルになるわけではない。明らかなのは，その国民が持っている質素な生活様式と勤勉を重んじる態度，つまりはステュアートが輸出競争力低下の最大の原因と見なす「奢侈」のコントロールが容易だ，というか，すでにできているという特殊事情だろう。その事情は，彼が『原理』のあちこちで多言する各国各々の「国民の精神 the spirit of a people」なるものに属することであり，モデルの共通要素ではない。オランダについては後に第 9 章の議論を例に見るが，おそらくステュアートは，もしその点について問われたなら，「オランダ人」になるのはオランダ人にしかできないから，とでも言うだろう。彼の展開する「原理」は，オランダを実例にしつつも，むしろ「オランダ人」になろうとしてもなれないすべての他国民に向けて語られる，そういったものになると思われる。もし彼が，すべてのヨーロッパ人はことごとくオランダ的質素･倹約を身に着けるのが美しいとか，それが可能だとかと主張する人物だったなら，第 2 編ははるかに簡略なもの（もっと言えば無内容なもの）になっていただろう。

第 2 に，私はこのモデルには工業製品輸出＝食糧輸入が組み込まれるといったが，それは食糧の輸出はありえないとか，全面禁止になるとかということではない。オランダの場合は実質ありえないかもしれないが，既述のように国内農業がどれくらいの比重で存在しているかは「経験」の問題であってモデル全体の問題ではない。ただ単に食糧価格を下げることだけが政策課題なのではなく（そうであるなら輸出禁止を固定すればいいが），国内生産の安定と拡大との両立を図る必要がある。豊作（これは事前に予想できない）で過度の値崩れを引き起こすことがありえるなら，輸出が制度的に認められているということはその必要条件になる。このモデルでは，食糧輸出はそうした価格調節の手段（いわゆる「穀物法」）としてのみありうるだろう（もはや引用は避けるが，これについては第 2 編の範囲内では第 15 章，p. 245 の記述を参照）。

121) ステュアートの表現では，農業主義は誤って農業を「増殖」の「結果」ではなく「原因」と考えている，というものになる。

122) これは無論本稿とは別個の論証課題であり，本稿の次に取り組まなければならない問題になる。

競争・利潤といった市場システムの基本概念の説明を行なっている。ここでそれらの概念規定や用語の意味の細部に立ち入るのは本章の主題からは外れよう。この検討範囲において，こうした概念説明とは別に外国貿易に関する具体的な記述がなされているのは，主に第5・6・9章である。したがってここでは，その3つの章を中心に本章の主題にとって必要な内容を摘出し，考察するということになろう[123)]。

ステュアートは，第1章から第4章で市場経済システムを支える需要・供給・価格の関係の一般論を示した上で，そのような市場システムの基本的な機能を内部に形成している国，彼の表現では「交易が定着している国 a country where trade is established」を「交易国民 the trading nation」，そうではない国を「非交易国民 the not-trading nation」という言葉で呼んでいる（pp. 172-174.）。上に仮説として述べたのは，その「交易国民」のいわば標準的な姿として，ここでオランダ・モデルと呼んでいる内容のものが想定されているということ，言い換えれば，世界にいる「交易国民」と「非交易国民」の2種類の国民は，そのオランダ・モデルの主体と，そのモデルに達していない国民とを標準としている，という意味になる。「外国貿易がどのようにして勤勉な国民 an industrious people に開かれるのか」と題する第5章は次のように始まる。

> 「前章で述べた状態から生ずる第1の結果は，必要な財貨の適切な価値と引き換えに，欲望が簡単に満たされるということである。／その次の結果は，**外国貿易が受動的と能動的という2つの形態で始まること the opening of foreign trade under its two denominations of passive and active** である。遠く離れた諸外国の人々が，自分たちの欲望を充足するのに自国では困難であるけれども，その供給がこの国でなら容易に行なわれることを知れば Stranger and people of distant countries finding the difficulty of having their wants supplied at home, and the ease of having them supplied from this country，ただちにこの手段に訴えるのである。これが受動的な貿易である。能動的というのは，すでに国内で首尾よくこの方策を実現した商人たちが，自国で大きな需要があり，したがって飛ぶように売れて最大の利潤が転がり込んでくるような，**加工に適した消費品目**を産出していたり，産出する能力があったりするほかの地域に，自国の人々の労働＜の生産物＞を輸送し始めるばあいである The active is when merchants, who have executed this plan at home with success, begin to transport the labour of their countrymen into other regions, which either produce, or are capable of producing such **articles of consumption, proper to be manufactured,** as are most demanded at home ; and consequently will meet with the readiest sale, and fetch the largest profits。／するとここに，能動的と受動的との2種類の外国貿易が開始される。…」（pp. 172-173. 強調は引用者。）

これはいわば，彼の言う「交易国民」が行なう外国貿易の一般規定だと見なすことができよう。無論問題は，ここに登場する「受動的貿易」－「能動的貿易」という対概念である。私は本章でこ

123) その3つの章のタイトルを掲げておこう。第5章「外国貿易がどのようにして勤勉な国民にひらかれるのか，さらに外国貿易はそれを新たに始める*商人*にどのような結果をもたらすのか」，第6章「受動的な外国貿易が簡素で無為な暮らしをしている国民のあいだに導入される場合の結果について」，第9章「能動的な対外商業の開始によって交易国民にもたらされる一般的な結果」。

れまでこの用語を少々曖昧に使ってきた。ここで少し立ち入って考えてみよう。

本章上掲注 107）でも触れたように，ステュアートは総じて，外国貿易の始まりそのものは，一攫千金を狙う冒険商人が未開人の驚きそうな品物を船に積んで行って金銀財宝を騙し取るといったことから説明し始める[124]。そこには，売りつけようとする「能動」者と，買いたくなった（そうならされた）「受動」者がいるだろう。本来この「受動的」–「能動的」という表現は，いわばそのような形態上の，少なくとも本稿で問題にしている農工関係に関わる内容の問題とは別の次元から生じているもののように見える[125]。

しかしながら，ここで目を止めなければならないのは，ステュアートはその「受動的」–「能動的」という表現の下に，そうした冒険譚めいたこととは別の問題を組み入れている，ということである。見ての通り，「交易国民」が行なうのは，自国の人々の「労働」の生産物を，それを欲するが自国で生産できない国に輸出し，代わりにその国から「加工に適した消費品目」を得る，ということであり，それが「受動的」–「能動的」の区別の内容になっている。この「自国の人々の労働」とか「加工に適した消費品目」とかいうのは少々分かりにくい言い方だが，続いて述べられる以下の文章と合せれば，その内包を明示することができるだろう。

> 「…この非交易国民が貿易業者に役立つ財貨をあまりもっていないならば，彼らの性向がどうであれ，貿易業者は彼らとの交易にほとんど考慮を払わないだろう。それでも，この国の住民がよく働き，貿易業者から洗練への嗜好を取り入れつつ，**生活資料品目を産出するために農業に専念する**ものとしよう but if we suppose this country inhabited by a laborious people, who, having taken a taste for refinement from the traders, **apply themselves to agriculture, in order to produce articles of subsistence**。この場合，彼らは，製造品 manufactures の一部を自分たちの品目と交換に譲ってくれるようにと商人に誘いをかけるだろう。そしてこの交易は，疑いもなく，交易国民の人口を増加させる効果 the effect of multiplying numbers in the trading nation をもつだろう。ところが，食糧を提供することができないとか，

---

124) 第 5 章や第 6 章での彼の議論は，まず冒険商人が金銀財宝のようなものを求めてどこかの未開国（非交易国）にはじめてやってきた，という場面設定で始まる。例示されるのは，「ぶどう酒とか，酒類とか，武器とか，狩猟用の弾薬とか，漁網とか，製造した衣類など」と，現地民たちが「最も大事に思っているもの，つまり一般的には贅沢なものや装飾的なもの」との交換である（p. 178）。だが，その商人と未開人たちとの間のあの手この手のようなやりとりには（確かにそれは，彼の使う需要・競争・利潤などの理論上の概念の説明の道具立てになっているものだが），既述の通り立ち入らない。

125) この「受動的」–「能動的」貿易という概念自体は，とくにステュアートのオリジナルではなくて一定の前史を持つようだが，ここではその歴史的詮索はしないでおきたい。

また彼はこの対概念を次のようにも説明している。「有利な外国貿易の導入に最も役立つものは，低廉で確定した価格である。第 1 に，それは外国人を＜この国の＞市場に引き寄せる。これを，われわれは*受動的な商業*と呼ぶ。第 2 に，そうした価格によって商人たちは自国の生産物を大いに有利にほかの国民に配分する機会を与えられるのであるが，これはわれわれが*能動的な外国貿易*と呼ぶものである。」（p. 452.）明示的に「価格」を介するということは，対価を貴金属貨幣として輸入と輸出を別々のものに切り離すことを意味しよう。何かの財が安い価格でそこにあるので他国から買いに来るのが「受動的」，安い（だが利益の出る）価格をもって何かを他国に売りに行くのが「能動的」，という説明のようである。これもまた本稿にとって問題の農工関係には直接関わらないはずの次元での規定である。

取引関係を継続させるのにほかにどんな生産部門もないとかになれば，洗練への嗜好はたちまち消滅してしまって，交易はこの方面ではやむだろう。」(p. 174. 強調は引用者。)

見てのようにこれは「非交易国民」の「受動的貿易」の説明であり，上記一般規定の中の一事例であろう。つまり，その貿易の出自はどうあれ，上の引用で一方が輸出する「加工に適した消費品目」なるものには農業生産物が入っていて，その言葉の意味は食糧・原料，今で言う第 1 次産品といったものになろう。一方その相手方が輸出する「自国の人びとの労働」というのは「製造品」(工業製品) に同定される。ステュアートはその 2 つのものの交換を，農産物輸出国にとっての「受動的貿易」，工業製品輸出国にとっての「能動的貿易」という，一実体でありながら 2 つの呼び名を持つもの，二重の意味を帯びたもの，と考えるのである。後世の我々は，アダム・スミス以降の貿易論がそれを区別せず，単なる国際分業とか比較優位に基づく公正な自由貿易とかと呼んだのをよく知っていよう。ステュアートはなぜこのようなことを言うのだろうか。

私には，そこには，よく言われるいわゆる「重商主義」の貿易差額論（確かにステュアートが保持しているもの)，つまりはその「差額」(あるいは国内の雇用・労働) の確保の点からは，自然産物の輸出よりも加工品の輸出の方が有利だ，といったこととは別の問題が伏在しているように思われる。「差額」がどちらに有利になるかは，本来「受動的」−「能動的」の区別とは別の問題だろう。私の思うに，ここで注目しなければならないのは，今引いた引用文でステュアートが描いている農産物輸出国が生まれる過程に関することである。それを考えるために，第 1 編第 18 章からのものを含め，さらに次の 2 つの引用文を並置しよう。

「勤労の精神によって国家がある程度の人口をもつようになると If ... a spirit of industry has brought the country to a certain degree of population，この精神は食物が不足するからといって挫折することはない。食物は外国からもたらされるであろうが，この新しい需要は，諸外国のなかで従来はその国自身の生活資料として生産されてきた量の一部をもち去ることになるので，＜外国の＞勤勉な人々は，自分たちに損害を及ぼさずに新需要を充足するために，進んで自分たちの土地を改良するであろう this new demand, by diminishing among them the quantity usually produced for their own subsistence, will prompt the industrious to improve their lands, in order to supply the new demand without any hurt to themselves。このように貿易は，ある国の住民を勤勉にすることによって，その国自身にはなんの損害を与えることもなく，別の国の欲望を満たすのであって，世界を全体として改良の方向 the improvement of the world in general に導くという明白な傾向をもつ。」(pp. 109–110.)

「製造品の価格がこの新しく接触した国民たちのあいだで可能な限り引き下げられるとすぐに，彼らの財貨の剰余が自分たちの欲望に比例する数量の製造品を購入するのに足りない場合は，この国民は労働し始めるにちがいない。というのは，労働は欲望――それが現実的なものであれ，想像上のものであれ――の必然的な結果だからである。そして，労働によって欲望が充足されるであろう。／このような事態になれば，ここにただちに，1 つではなく，2 つの交易国民が出現することになる。そして，この貿易の差額 the balance は勤勉と節約に優る the most industrious and frugal 国民につねに有利であろう。この点はほかのところで十分に明らかにする。」(p. 177.)

各引用の前後の文脈を追うことは省略し，また顔を出している「貿易の差額」についても措く[126]。上に言ったように，問題は農産物輸出国が生まれ出る過程であり，見てのように，ステュアートはそれを「受動的貿易」の延長としてしか描かなかった，ということにある。我々はここで，本稿で既に述べた2つのことを想起せねばならない。1つは，本章上記「第2の論点」，つまり農業が自ずと国外に余剰を輸出するようになる，外国貿易における「能動的」な性質を自然に帯びる，ということはない，という認識[127]，そしてもう1つは，本稿で縷々述べてきた，農業は「結果」であるという命題に集約される，いわば彼の商品＝貨幣経済の成長論である。

既述のように，外国貿易自体の始まりは，金銀財宝を求めて未開人（受動者）を誘う欲深い商人の行動でもよかろう。だが農産物の輸入は，そこでの「能動」者の方の国，つまりindustryによる「ある程度の人口」を抱えて食物の不足＝食糧価格の相対的な上昇をきたし始めた国の方が必要としているものである。したがって，確かにそれは「受動」者だった国民の側の主体的な商品生産となり，それによって「非交易国民」だった未開国が「交易国民」に転換した，という意味を示すものとなるにちがいない，ステュアートはそこまでは認める。しかしながら，それでもなお農産物輸出は「受動的貿易」なのであり，それ自体が，彼が国民経済の戦略的基幹と見なす「能動的貿易」になることはない。つまり，それはいわばどこまでも「受動的貿易」の子孫であり（ステュアートはこのような表現はしていないが），上記2人の兄弟を抱えた「交易国民」が「活動の推進者actors in the operation」（p. 276）となって展開する「能動的貿易」の「結果」以上のものにはならない，彼はそう考えているのではないだろうか。上記オランダ・モデルの国は，農産物の恒常的な輸出国でも，あるいは農産物しか輸出しない国でもありえないのである。

そしてさらにステュアートの言うには，その2人の兄弟を抱えた「能動的」な「交易国民」は，世界中の未開国をこの「受動的貿易」に引き入れ，言うなれば，それを「受動的」な「交易国民」に変えていくという意味で，the improvement of the worldを繰り広げるだろう（その言うimprove・improvementという言葉の意味がつまりは商品経済化というのと同義になる，ということは本稿（4）の注93）で述べた通りである）。確かに，当初それは「その国自身にはなんの損害をあたえることもなく」始まるのかもしれない。だが一方でステュアートは次のように指摘する。

> 「自国の商業に関していつまでも受動的な国民は，能動的な国民の意のままになるのであってA nation which remains passive in her commerce, is at the mercy of those who are active，自国の富の増進にとって必ずしも有害ではない通商関係の維持を可能にするためには，実のところ自然の利点とか，自国に属する鉱山からの金銀の流入とかによって支えられる必要がある。」（p. 192.）

「能動的な国民の意のままになる」というのは，成長のエンジンとなる工業部門を自国に持っていないから，ということだろう。その「いつまでも受動的な国民」は，もしも「自然の利点」（何らかの農作物を安価に安定して生産できる，といったことだろう）や貴金属鉱山があるのならば，「自

126) ここでステュアートが言うように，「差額」は貿易の受動－能動を問わず，生産活動に関わる「勤勉と節約」が決めるだろう。

127) 一応述べておくが，本章上掲注120）で言ったように，これは「穀物法」の下での輸出の容認を排除しない。

国の富の増進にとって必ずしも有害ではない」ようにその状態を続けられるかもしれない。だが，そうではないのならば（またはそうでなくなってしまえば），他国の「意のままになる」ことだけが残るだろう。後世の言葉で「幼稚産業保護主義」と呼ばれるもの，ステュアートにおけるディリジズムの課題の1つ（その1つにすぎないもの）が否応なく口を開けることになる[128)]。

(5)　オランダ・モデルと「能動的貿易」：第9章

次に第9章の「能動的貿易」の方に関する議論を見よう。はじめにこの章全体の内容について一言しておきたい。

この章の冒頭にあるのは，次の印象的なパラグラフである。「本章ではきわめて一般的な問題を論ずることだけに限定するつもりだが，そうでないとしたら，この表題のもとで私は現代経済の全主題を検討し尽すようなことになったかもしれない。というのは，私の理解するところでは，現代政治の全体系は能動的な外国貿易の基礎の上に成り立っているからである the whole system of modern politics is founded upon the basis of an active foreign trade。」（p. 192.）

私の理解では，この章は上記オランダ・モデルの説明なのである。つまり上にも述べたように，ステュアートが，オランダを現実の例としながらも，「能動的貿易」の主体たる以上は他の「交易国民」にも当てはまるものだ，と考えている事柄である。

そして，この文章に対応させるためなのだろう，自ら「狂想曲」と呼ぶ，はるかに第4編まで視野に入れた物語風の叙述がある。だが本論を成すのは，その「狂想曲」を止めた後の，「外国貿易の開始が勤労国民にもたらすもっと直接的で一般的な変化についての推論と冷静な検討」（p. 194）という部分であり，ここではそれに検討対象を据えよう。

先に，章全体の結論とも言うべき最末尾の一文を引いておきたい。「以上のことから，食糧を安価にし，しかも，それを常に一定の水準に保っておくことがオランダの富の源泉であり the keeping food cheap, and still more the preserving it at all times at an equal standard, is the fountain of the wealth of Holland，そして，この品目についての有害な競争が起こりでもしたら，1国の全製造業

---

128)　既述の通り，第2編（主に第12章以降）で語られる，この「保護」のための（あるいは彼の「3段階」論で停止した輸出を再開させるための）あの手この手のような政策提言は本稿の問題関心ではない。

ただしここで，かつて故小林昇氏が強調されていたステュアート評，例えば「『原理』の「保護」貿易の主張がイギリス重商主義の最盛期のそれとちがって，初期産業資本自身の強烈なエネルギーを感じさせないということは事実である」（小林昇『最初の経済学体系』，名古屋大学出版会，1994年，p. 108）といったそれを想起することは有意味なのかもしれない。確かに，このイングランドによって石もて故国を追われた流亡者，「世界市民」の自称者の態度は総じて，オランダを含めおよそ「原理」はこうなのだから，各国が各々なりに励めばよい，といったものだったように見える。とはいえ私は，小林氏が抱いていたらしい，それをある種の欠陥のように見なして残念に思う心情を持っていないので，さしあたり次のように考えたい。もしステュアートが，その「保護主義」の必要を，本稿で述べてきた農業主義批判を主たる論理的導線として導き出そうとしたのだとすれば，そしてそれによって，どこかの国の特定の工業部門の「保護主義」ではなく，文字通り商品経済システム一般の「原理」としての「保護主義」を示そうと意図したのだとすれば，当時のイングランドの毛織物工業の特殊利害とか（それが「初期資本」であろうとなかろうと）に目を向けるような必要性は，彼にははじめから感じられなかっただろう，と。

者に影響を与えるような混乱が生ずるにちがいない any hurtful competition in this article must beget a disorder which will affect the whole of the manufacturers of a state と，私は結論を下す。」（pp. 200-201.）見てほしいことは 2 つ，つまり，ここにある 2 つの文節の内の前者はオランダ，後者は a state なる一般名詞の国についてだ，ということ，そして章全体の真の主題は，すでに第 1 編で論じたはずの食糧供給の問題だということである。

なお内容に立ち入る前に言っておかねばならない。この章の叙述は多くの論点が複雑に交差しており，私の力ではほとんどどこをとっても手短な要約が難しい。直接の引用をつなげていくような論じ方になってしまうが，私自身の理解のための研究ノートとして寛容してもらうほかない。以下，できるだけ小分けにしながら考えていきたい。

オランダ・モデルでの農工間移動

さてステュアートの言う「推論と冷静な検討」の内容を見ていこう。まず外国貿易のそもそもの始まりだが，既述のようにそれは冒険商人のような輩の蠢動でかまわない。そしてその時点では，国内経済は彼の言う「交易国」の条件を備えているが，食糧供給は国内農業だけで行なわれているだろう。まず述べられるのは，そうした前提で，ある国に「能動的貿易」が始まったことで起きる変化である。

> 「最初の，そして最も顕著な変化は製造業者への需要の増大 an increase of demand for manufacturers であろう。というのは，外国人の欲望を満たすことによって，消費者の数が今やかなり増大することになるからである。このことに続いて何が起こるかは，状況のいかんに依存せざるをえない。／需要の状態のこの大きな変化があまりにも急激すぎる too violent とすれば，その結果は需要を*高める raise* demand ことになるが，変化が緩慢 gradual だとすれば，それは需要を*大きくする increase* であろう。この区別はよく理解されるし，しかも上のような結論は正確なものだろうと思われる。というのも，供給が需要に比例して増加しないときには，すぐに競争が需要者の間で起こるからであって，それがこのような変化にふつう伴う結果なのである。他方で，需要の穏やかな増大にはそれに比例した供給が伴うとすれば，とくに大きな利益なり不利益なりを感ずることもなく，勤勉な社会は全体として活力が増し，健全な背丈に成長していき，その状況の変化自体も知覚できないくらいであろう。」（p. 194.）

つまり，オランダ・モデルが想定している，工業製品輸出による外需の拡大を起点にした成長プロセスが始まる。ステュアートは続いて，これに先立つ第 2 章や第 7 章で説明された需要の変動と競争についての議論を当てはめ，その需要の変化が「緩慢」な場合と「急激すぎる」場合とに分けている。言いたいことは，前者の場合には，外需増に対応した国内での供給増大を適宜進めることが可能になる，したがって需要が「高まる」ことでの過度な価格変動を抑制しながら全体の拡大が進む（彼の言う「天秤」が緩やかに振動しながら均衡と成長が両立する）ことを望めるだろう，として，一方で理念像を提示しておく，ということだろう。だが問題は外需であり，本来いつどこでどれだけの量が現れて消えるかも（消える方はここでは問われないが）保障の限りではなかろう。

当然後者の場合がモデルの標準となる。彼は以降そちらの場合のみを問題にしていく。

「急激な変化の直接的な結果は，この例では，人によっては気分のいいものだろうが，また別の人には好ましくないものである。価格が騰貴するがゆえに，多くの勤労部門においては富が日ごとに増加するのが見られよう Wealth will be found daily to augment, from the rising of prices, in many branches of industry。これは勤労階級 the industrious classes には刺激を与えるが，国内の無為の消費者 the idle consumers at home は不平を言うであろう。私はすでに，下層階級の人々 the lower classes of the people に一定の生存手段を与えるという観点に立って，このことから生ずる影響についてかなり詳しく論じてきた。こんどは，上流階級 the higher classes がはじめのうちはそのために一時的な不都合 temporary inconvenience を経験するにしても，同じようにこの一般的な変化の好ましい結果をどういう点で感じるようになるのかについて検討してみたい。／前に述べておいたように，農業者は使用人 servants を探し出すのがさらに難しくなるであろう。この使用人は，土地を耕す代わりに，みずから製造業者に転身する turn themselves to manufacturers ことを選ぼうとするからである。われわれはこのことを，土地からの余剰人口の追放 purging the lands of superfluous mouths という観点から考察しておいた。しかし，政治のこの大きな連鎖における各因果関係は，そのあとにほかの諸々の因果関係を伴っており，それが次から次へと続くにつれて，事態は異なった様相を呈し，そのことがもろもろの階級にそれぞれ違った影響を与えるのである。土地からの追放 the purging of the land は最初の影響の一つであるにすぎず，これにほかのことが続くのである。／零細な農業についていた人手の離脱 The desertion of the hands employed in a trifling agriculture は，初めは確かに農業者を困惑させ，賃金の相場 the price of wages を上昇させるであろう。しかし，交易国民にあっては，日ならずしてあらゆることが釣り合うようになる。ここでは，状況がどのような組み合わせになろうとも，*勤勉な*人は誰でも間違いなく次第に繁栄していく every *industrious* man must advance in prosperity からである。」（pp. 194-195.）

国内市場のみだった工業製品に，外需増大の影響で価格上昇が起きて，まず工業部門で貨幣蓄積が進み，同時に小農層の離農＝工業部門への移動が起きる，ということである。これはつまり，第1編での［因果連関 C］の前半部分，国内の「富者」による新規の需要増を，今オランダ・モデルと呼んでいるものを前提に外需と特定して置き換えたものだろう。また第1編での小農層解体のプロセスについても本稿［5］ですでに見た。だが，おそらくここで注意しなければならないのは，ステュアートは明示していないが，［因果連関 C］に伴うその the purging of the land のプロセスがモデルの変更に伴って変容している，ということである。

第1編の想定では，工業部門への需要増大は国内の奢侈から，つまりは国内農業に依拠する地主層の消費から起きることになる。だからステュアートはそれを，イングランドにおけるエンクロージャー，つまりその国の地主たちが地代率を上昇させるために小農を強制的に追放した歴史過程を例にして説明したのである。本稿で既述の通り，それは奢侈と貨幣の作用だった，という意味で［因果連関 C］の展開過程の一部になる。しかしながらそこでは，工業部門の拡大の先行条件は，国内の農業部門がいわば自己再編して生産（無論総生産ではなく「余剰」生産）を拡大させることであ

る。そのためステュアートは，そのプロセスが結果として農業人口の減少＝農業から工業への労働力移動を引き起こした理由を説明するために，わざわざ1つの章（第8章）を割いて穀物畑と牧場の人口保有の相違を計算することから始めなければならなかったのである。

しかし，第2編のモデル（私は一応オランダ・モデルと呼んだが，既述のように，それは本来どこの国の出来事とも特定されないものである）では，そのようなイングランドの特殊な歴史過程は別に必要とは考えられない。見てのように，このモデルで起きる農業から工業への労働力移動は，工業部門で賃金（あるいはもっと曖昧に「所得」とか「収入」とかとでも言った方がいいかもしれないが）の上昇が先行して起きることに誘われての自発的な移動である。新規の需要が外需であることで，国内農業の対応は事後的・受動的なものにしかなりえないからである[129]。

貿易差額と人口－2つの「均衡」の同時振動－

その上で上記引用に戻るが，そこに言う，外需の増大がまず「上流階級」（地主貴族だろう）に引き起こす「一時的な不都合」というのは，工業製品（それも輸出品にもなるもの）の価格上昇と，賃金の上昇による「農業者 farmer」の所での経費増により地代と利潤が圧迫されること，という意味かと思われる。だが見てのように，続いて彼が言うのは，それは「日ならずして in a little time」解消し，「あらゆることが釣り合うようになる every thing becomes balanced」，つまりまずは工業に傾いた「天秤」が自ずと農業に向けて反転して均衡を取り戻す，というのである。具体的には次のように。

> 「当面の例においては，使用人のための追加費用が全農業者階級に影響を及ぼさざるをえないので，農業での相対的利潤[130] は間もなく以前よりも大きくなるにちがいない。したがって，この追加費用は地主ないし農業者にとって損失となるのではなく，しばらくすれば，結局は双方の利益となるのが分かってくるだろう。というのは，土地の生産物は誰にとっても必要不可欠であるために，いかなる品目であれ，その産出のための費用に比例して，その価値が増大しなければならないからである。こうして，間もなく，すべての人の帳尻は均衡するようになるだろう。すなわち，富の比率は，*ほかの事情が同じならば*，勤労者の間ではいつも同一であり続けるだろう。Thus in a short time accounts will be nearly balanced on all hands ; that is to say, the same proportion of wealth will, *caeteris paribus*, continue the same among the industrious. 私は勤労者の間ではと言うのだが，それは，無為の人や注意散漫な人々が大きな損失をうけるだろうからである。」（p. 195.）

要するに，農業では需要に変化はないけれども，食糧の消費物としての特性から容易に価格転嫁

---

129) ここでステュアートは，このような違いをことさら言う必要を感じなかったようである。どちらも［因果連関 C］に随伴する原理の一部だ，というのが彼の問題意識なのかと思う。良かれ悪しかれ，オランダ・モデルはイングランドの特殊な歴史過程が何をその後に残したか，ということには関わらない。

130) これは第8章で説明される利潤概念の一つで，次のように定義される。「*相対的利潤 Relative profit* とは，誰かの損失を伴うものである。それは当事者間における富の均衡の振動を示しはするが，総資財 the general stock へのなんの追加も意味しない。」（p. 192.）

がなされ，利潤・地代の同等の増大が起きる。こうして最初に生じた工業製品の価格上昇は農産物に及び，「無為の人や注意散漫な人々」つまりはこの「交易国」の trade の網の目に然るべく関わっていない者たちを除く，言葉の本来の意味での the industrious は等しく所得の増大を実現する。その国の the industrious の間には同じ「富の比率」が保たれることになるであろう。

ここまでが，このモデルにおいて，最初の外需増大の影響が一巡するまでの過程である。ステュアートはそれを，「有益な拡大的貿易 an additional beneficial trade」が「需要を高め富を増加させる it raises demand and increases wealth」結果になったものと言うのだが（p. 196），2つのことが言えよう。第1は，見ての通り問題は，プラスの貿易差額として流入した貴金属貨幣（ここで「富」と呼ばれているもの）なのだが，それは農工両部門に各々違う経路で影響をもたらすということ，そして第2には，この1回の限りで見れば，今のところこの国で増大したのはその貴金属貨幣のみであり，実物生産は変化していないということである[131]。そこで彼は次のように議論を進めることになる。

> 「しかし，それに比例した供給の増加がないと想定すれば if we suppose no proportional augmentation of supply，それはせいぜいのところ束の間のはかない夢にすぎないだろう。そして，金色に輝く情景が消えうせたとき，数知れないほどの弊害 inconveniences がそれに続いて現れる。／私はここで，人口とか勤労の生産物に対する需要とかが増大したのに，**為政者**がうかつにも，それに比例した食糧と製造品の増大を怠るときに when, in proportion to **the augmentation of mouths**, and of the demand for the produce of industry, **the stateman** remains inattentive to increase the supply both of food and manufactures，他の国民から引き出された富のこのような増加 this augmentation of wealth drawn from foreign nations によってもたらされる自然な結果を指摘しよう。」（p. 196. ゴシック体による強調は引用者。）

ステュアートが危惧しているのは，このモデルでの運動の起点になる，外需増大による貴金属貨幣の増加つまりはプラスの貿易差額の獲得（「他の国民から引き出された富のこのような増加」）から，農工各々でのそれに「比例した供給の増加」に至る経路である。そして，そこでこのモデルにおいてはじめて「為政者」が姿を現す，つまりモデルの中にその機能（ディリジズム）が組み込まれる，ということに注意しなければならない。彼の言うには，「為政者」がそれに不注意 inattentive なままでいると，つまりは何もせずに放置すれば，この貨幣増大からは数知れない不都合が現れてくるという。具体的には何なのか。私はここでさらに長い引用をしなければならない。

> 「このような状況のもとでは利潤が日ごとにふくれあがって，それを適度な限界内に落ち着かせようとする試みはすべて有害で評判の悪い方策と見なされるであろう。それはそれとして，この結果を検討してみよう。／われわれは，製造品への需要が高まれば，おのずと仕事の価値が増大する the rise of demand for manufactures naturally increases the value of work と述べておいた。ここで私が付け加えなければならないのは，*土地を改良する能力がない国とか，生活資料の輸入によって住民の増殖を促進し*

131) 一応注意を促しておくが，ステュアートの場合，だからといっていわゆる貨幣数量説を前提に，ここでは全般的な貨幣インフレーションが起きているだろうといった想定をしてはならない。

ようという措置を講じてこなかった国とかでは，富の増加は最も悲惨な結果を招くだろう，ということである I must add, that under such circumstances, the augmentation of riches, *in a country, either not capable of improvement as to the soil, or where precautions have not been taken for facilitating a multiplication of inhabitants, by the importation of subsistence*, will be productive of the most calamitous consequences。／**一方では，この富は以前に生産された食糧の大部分を着実に減少させ，しかも他方では，無用な消費者の数を増加させるだろう。これらの事情のうち，前者は食糧に対する需要を高め，そして後者は有用なフリー・ハンズの数を減少させ，したがって製造品の価格を騰貴させるだろう。この事態の進展は，**簡単にしるせばこのようなものである。／国民が富裕で贅沢であるほど，彼らの生活様式はそれだけ洗練されていく。これまでパンを常食にしていたとすれば，これからは家畜の肉を常食にするであろう。以前に家畜の肉を常食にしていたとすれば，今では鳥肉を常食とするであろう。100 人にパンと，それに見合った動物性の食糧とを供するその同じ土地が，同数の美食家を養うことはないだろう。そこで食糧はますます乏しくならざるをえなくなり，それへの需要も高まる Food must then become more scarce ; demand for it rises 。富者は市場においては常に最も強い。彼らはこの乏しくなった食糧を消費し，貧者はやむなく飢えに追いやられる。ここに**現代的な窮乏**への広い扉が開かれる。すなわち，生活資料を求める有害な競争への扉が開かれるのである。Here the wide door to **modern distress** opens ; to wit, a hurtful competition for subsistence.」（pp. 196-197. ゴシック体による強調は引用者。）

これは，上にこの章の真の主題だと述べた，食糧供給の問題に議論の焦点が絞られる箇所である（私はこの邦訳書の訳文に少し異論があるが，それは後述する）。おそらくその問題については，我々は容易に一連の系論を予想するだろう。つまり，外需増大による工業製品の価格上昇（「仕事の価値が増大する」こと）が続けば，そもそもこのモデルの運動の起点である輸出が停止する，そしてその工業製品価格の大きな構成要素は食糧価格である，だから食糧を低価格に保たなければならない，というものである。ステュアートにとってその系論が極めて重要なものであることは間違いない。しかしながら私には，はじめからこの議論をその系論に当てはめて考えてしまうと，ある論理位相の見落としが生まれかねないように思われる。

私が本章のはじめに述べた，『原理』第 2 編の全体構成の中でのこの章の位置を想起してほしい。私はそこで，第 2 編は第 11 章と第 12 章の間に論理的区分線を引くことができるのではないかと述べた。それは，ここで言い換えるならば，第 12 章で「能動的貿易」の主体つまり本稿で言うオランダ・モデルの国を複数化して明示する（「国民的競争」）までは，論理の基調はそのモデルを単独のものとして考えることにある，という意味になる。だからこそステュアートは，上に見たように，今問題にしている貨幣増大の結果は国内のすべての the industrious への同じ「富の比率」の配分だ，と言うのである[132)]。ここでは，本稿で強調してきたその論理位相にとどまって考えねばならない。

そうすると問題は，いくら貨幣増大が進もうとも，彼の言うようにその「富の比率」が同一であるのなら，つまり誰もが比例して所得を上昇させるなら，一体何の支障が起きるというのか，ということである。確かに工業製品の価格上昇が続くならば，やがて外需が失われて輸出が停止するだ

132) 今言った「論理の基調」ということの意味については，本章上掲注 107）で述べた。

ろう。だが，それに関わる議論の本体は第 12 章以降になる。

ステュアートは何を問題にしているのか。彼の答えは，上記引用文の中の次の箇所である。「一方では，この富は以前に生産された食糧の大部分を着実に減少させ，しかも他方では，無用な消費者の数を増加させるだろう。これらの事情のうち，前者は食糧に対する需要を高め，そして後者は有用なフリー・ハンズの数を減少させ，したがって製造品の価格を騰貴させるだろう。On one side, this wealth will effectually diminish the mass of the food before produced ; and on the other, will increase the number of useless consumers. The first of these circumstances will raise the demand for food ; and the second will diminish the number of useful free hands, and consequently raise the price of manufactures : 」

理解の正確を期すために原文を付した。今言ったように，これは単独のオランダ･モデルの展開，つまり「国民的競争」とは関わりなく進んでいる事態である。彼の答えは，ある意味では驚くべきものなのかもしれない。「この富」つまりプラスの貿易差額たる貨幣増大が「食糧需要を高める」，というのである。問題は食糧価格の上昇であるが，すでに上掲注 131）で触れておいたように，全般的な貨幣インフレーションが起きたからだ，と考えてはならないし，また，所得が増加していわば国民全体が大食いになって食糧消費量が増えた，などといったことでもない[133]。既述のように，すでに農産物価格も上昇して「すべての人の帳尻は均衡」している。なぜこの貨幣増大によって，その上さらにこの均衡を超えた食糧価格の上昇が起きるのか。

上の長い引用文の最後のパラグラフで，「この事態の進展」として述べられているのはその理由であるが，その前に，以前の叙述から見て取れることがあろう。私の思うに，実はそちらにこの章の真の主題がある。それは，最初の工業製品価格の上昇が農産物に波及する過程について，ステュアートが行なっている説明から辿ることができるだろう。

そこでの工業製品の価格上昇は，外需が加わって需要量全体が増大した（つまり彼の用語で言えば great になった）ためのいわゆるディマンド・プル型のものと言えるが，食糧価格の上昇は当初は純然たるコスト・プッシュ型であり，しかもそれは，食糧の場合は価格転嫁が容易なことから起きる，というものだった。そうするとそこでは，放置しておいても，自然に個々の私的主体から供給量を増大させようという動きが出てくることはないのではないか。需要量は変わらないのに，自ら供給を増やして価格を引き下げようとするはずはないであろう。そしてこれがいわば初期局面になり，それに，本稿で繰り返し述べた，所得増加とともの工業者の「増殖」が接続するだろう。つまり，本稿［3］で第 1 編第 6 章の記述を基にして述べた「因果連関 C」が発動し始める，ということである。上に引いたステュアートが「為政者」を登場させた文中の the augmentation of mouths がそれに当たるはずである。この食糧需要の増大は，まずは供給の量的不足と価格上昇を引き起こすだろう。そして本章上記（2）の最後で「第 3 の論点」とした問題が現実のものとなり，「為政者」はそれを速やかに解決することを迫られる。

すなわち，第 2 編で述べている工業製品の価格上昇，つまり「仕事と需要」の「均衡」が揺らいでいるその背後で，第 1 編で述べた「食糧と人口」の「均衡」が同時に揺らぎ始める，ということ

133）後述するように，ステュアートはむしろ，奢侈によって人間が繊細になると，食糧消費は質は高まるが逆に量は減る，とでも考えているかのようである。

である。それがここでのステュアートの議論の要点であろう。

彼が言うように，食糧供給に関して「為政者」に直接できることは，国内農業の増産のための「土地の改良 *improvement as to the soil*」（それには農業の「余剰」生産力を増大させるあらゆる手段が含まれよう）を奨励するか，食糧輸入 *importation of subsistence* を進める（つまり「穀物法」を設定する）か[134]，だろう。ただし既述の通り，前者は「追加的費用を要する」土地への農地の拡大を進行させるかもしれない。同じく既述の通り，どちらになるかは「経験」の問題である[135]。

食糧をめぐる現代的窮乏

このようにプラスの貿易差額による貨幣増大が「食糧需要を高める」経路，つまりは上記の 2 つの「均衡」が連動して揺らぎ始める経路について，今述べたものを［**経路 1**］としよう。というのは，上記引用文の「この事態の進展」なる最後のパラグラフで，彼はもう 1 つの経路を述べているからである。

その内容について先に言っておくべきことは，［**経路 1**］の方は，工業製品輸出に需要増大の起点を置くオランダ・モデルである以上はほとんど自動的に進行するものであるのに対し，見てのようにこちらは，「国民が富裕で贅沢であるほど，彼らの生活様式はそれだけ洗練されていく The more rich and luxurious a people are, the more delicate they become in their manner of living」という点，つまり貨幣増大が国民の生活様式を奢侈的にする，ということに起因するものだということである。したがってそれは，本章上掲注 120）で述べたように，luxurious にはならない国民つまりオランダ人を除いた，このモデルの内の他の諸国民に該当する事柄だということになる（後述のように，事実ステュアートはオランダについては別の説明を付加している）。つまり，その内容を先に［**経路 2**］と名付けておくならば，オランダは［経路 2］は免れるが［経路 1］によって，そしてオランダ以外の国はいわば［経路 1］と［経路 2］との複合によって，各々食糧価格の上昇が起き，「為政者」の課題として降りかかってくる，ということである。

その上で，言われている内容を見てみよう。少々分かりにくい所があるが，次のようなことではないかと思う。まず，上記［経路 1］について述べたように，最初の外需増大に伴う農工両方での価格上昇があり，さらに国内農業の供給量が硬直的な間に［因果連関 C］が発動して，それによる食糧価格の上昇があろう。問題は，その国民が奢侈を受け入れるものの場合は，それによる動きが加わる，ということである。

その国民は，所得の増加とともにより単価の高い食品を買うようになろう。そして国内の農業生産もそれに応じて品目をシフトさせていく。そうすると，従来貧困層に供給されていた低価格の食糧品目は，先の価格上昇に加えて減産していくことになり，国内農業が生産するその実物としての（つまり人口数量に照応する栄養物量としての）食糧の総量は減少してしまうだろう。すなわち，「この富は…大量の食物を**生産される前に**減少させる this wealth...diminish the mass of the food before

---

134) 本章上掲注 120）で触れたが，これはステュアートにとって，オランダ・モデルが供給の安定と価格調節のための「穀物法」を内部に組み込む原理的根拠である。

135) 無論それはその 2 つの手段の単なる 2 者択一ではない。これについては，本稿次章で，第 1 編の残り部分と第 2 編第 10・11 章を考える際に取り上げよう。

produced」[136] という結果になって，低価格の食糧品目の需要は高まり，さらに高率で価格が上昇するだろう。上に述べたように，工業部門での「仕事と需要の均衡」が揺れる背後で，［経路 1］によって始まる「食糧と人口の均衡」の揺れにさらに揺れが加わり激しさを増す。そして，もしこの進行が放置されるならば，「富の増加 the augmentation of riches」は「最も悲惨な結果 the calamitous consequences」を生むだろう。貧困層の食糧不足は極めて深刻になる。国民の内部で食糧をめぐる「有害な競争」が起き，「現代的な窮乏 modern distress」への扉が開くのだ，と。

私には，この「現代的窮乏」という表現がこの当時よく使われるものだったのかどうか，ただちには分からないのだが，意味としては，安い食糧の奪い合いが，天災・飢饉といった理由からではなく正常に生産が行なわれている中で起きる，ということなのかと思う（本章上記（2）で見た第 1 編第 15 章での，イングランドでは食糧輸出にも関わらず，食糧不足のために死亡している者たちがいる，という記述を想起すべきかもしれない）。ステュアートは，もし為政者が何もしなければ（自然のままに任せるならば），人口増殖と農業は，現実に食糧供給の危機を生じさせる，つまり飢饉・凶作でもないのにまじめに働く者たちが十分な食糧を得られないという事態を引き起こすことを，近代社会における必然（あるいは極めて蓋然性の高いこと）と考えている。周知のように，その後のアダム・スミスの登場と『原理』の忘却とをはさんで，マルサスが異なる意匠をまとわせる認識である[137]。

次に，上に触れたオランダについての記述を見ておこう。それはこのように始まっている。「しかし，外国貿易の本来の原理 true principles が理解されている国にあっては，奢侈が外国貿易に必然的な随伴物ではない luxury is no necessary concomitant of foreign trade ことは，私が対照的なものとしてこれから示す商業と倹約とで知られる一現代国家の例から，非常にはっきりするであろう。私のいう国はオランダである。」（p. 198.）

上記のように，貿易差額による貨幣流入で国民生活が奢侈化するのを容易に防ぎうるオランダは，［経路 2］に関わる問題を免れていよう。だが［経路 1］の問題は免れえない。ステュアートは，オランダという現実の例を挙げることで，このモデルすべてに貫通している本質的な性格を理解させようとしたように思われる。「したがって，勤労を維持する唯一の方法が，起こりうる需要につねに比例した生活資料の供給である the only way to support industry, is to provide a supply of subsistence, constantly proportional to the demand that may be made for it のは明らかである。これが有害な競争を阻止するのに必要不可欠な予防策である。これはオランダ人が特に留意していることであって，それが有効でありうる限りは，彼らの国が衰退する恐れはありえない。彼らがその生活資料を仰いでいる市場で難渋するようになれば，その場合はいつでも彼らは破滅の淵に沈むであろう。」（pp. 199–200.）こうして本節のはじめに引いたこの章の末尾の言葉，a state なる一般名詞に関する

136）これは邦訳書とは別の私の解釈である。

137）ステュアートが第 1 編第 15 章で，食糧を得られないイングランドの貧民への対処を，「この著作全体 this whole book（第 1 編を指すものだろう－引用者）を通じて私が念頭に置いている主要な論点 my principal point in view」だと述べている（p. 92）ことの重さに注意を払うべきだろう。本章上記（2）でも言ったが，マルサスとの関係をどう理解するかについては次章で考えたい。

一文が導かれるのである[138)]。

＊　　＊

以上本章では，第2編の一部まで検討対象を広げ，第1編の第15章から第18章，第2編の第5・6・9章を取り上げた。最後に，本稿次章（最終章）の課題について簡単に言及してこの章を終えたい。

私は本章で，とくに第2編第11章まで，つまりステュアートが「国民的競争」を明示する直前の論理位相に視点を置いて，便宜的にオランダ・モデルと呼んだ内容を取り出し，それを，ステュアートが近代社会＝現実の商品経済システムを理解する際の原基構造と位置づけた。その主たる含意は2つである。

第1は，本章（5）で見たように，ステュアートがこのモデルに「為政者」を導き入れる理由，言い換えれば，彼のディリジズムの本来の基盤は，外国貿易が引き起こす「国民的競争」自体とは別の問題から生まれてくるという，ステュアート論としてはごく当り前のことである。私はそれを，近代国民とその国家がオランダ・モデルに達する（本章で述べた「能動的貿易」の主体になる）ため，さらにそのオランダ・モデル自体が内在させている不安定性に対処するための「為政者」の責務の束，というように考えておきたい。それは，今言った第11章で，彼が「為政者」のなすべき課題について，「原理は食糧と住民と仕事と需要との緩やかな増加を維持することにある The principle … being to support a gentle increase of food, inhabitants, work, and demand」（p. 213）と端的に規定している通りである。本稿次章では，上記の論理位相を踏まえつつ，その「為政者」の課題を，本稿でいまだ残している employment という問題に即して把握してみようと思う。

さらに第2は，本稿の後の別稿の課題に関わる。今私は上に，そのオランダ・モデルを，ステュアートにとっての現実の商品経済システムを理解する際の原基構造と述べた。当然その一方で考えなければならないことは，そのような意味での原基構造には別の構想がありえたし，現にあったと

---

138) あと第9章には，上に見てきた経緯で工業製品価格が上昇すると，「受動的」だった貿易相手国が自ら製造を始めたり別の輸出国に市場を奪われたりして貿易が停止するという，つまりは第12章以降の先取り的な議論が含まれているが，既述の通りここでは立ち入らない。

最後に，上に見た引用文の中でステュアートが，「この富」（プラスの貿易差額）は，今言った食糧需要を高めることのほかに，「有用なフリー・ハンズ」の人数を減らす，と述べていることについて述べておこう。それによれば，工業製品価格は，当初の外需増大による価格上昇があり，さらにこの2つの作用の結果として consequently の上昇が加わる，ということになろう（そこの引用中最後の raise the price of manufactures の部分の主語が少し曖昧だが，全体の文意からして the first と the second の両方によって，と解したい）。とはいえ，食糧価格の上昇が工業製品価格を引き上げるという理由は明らかだろうが，「有用なフリー・ハンズ」の人数が減る，という方はそうでもないだろう。彼が言うのは次のようなことである。「国民が富裕になると，節約を軽視するようになる。多数の無用な使用人が雇われるが，それによって結局は消費への荷重が増す a number of useless servants are hired, to become an additional dead weight on consumption。しかも，貧窮の同胞が他の国民ほど安く富者の浪費に供給することができない場合には，富者は外国産の奢侈の手段を購入したり，あるいは自国から出かけていってこれを享受したりして，こうして自分の利得を返還するのである。」（p. 197.） つまりは，国民生活への奢侈浸透によって，生産的な部門から不生産的なそれ（サービス部門とでも言えば現代的になるだろうか）へと労働力が移動する，また国産品よりも外国製品の消費が増える，といった理由から国内での工業生産の減少とその一方での消費増大とに結果する，ということかと思われる。

いうことである。私はそれを，本稿でステュアートとの対抗を述べてきた農業主義との関係という視点から理解してみたい，と考えている。

（つづく）